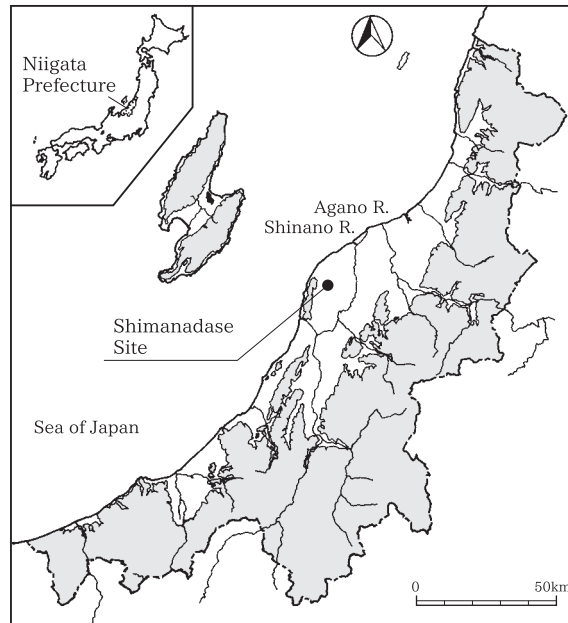


しま なた せ  
島灘瀬遺跡 第5次調査

— 県営ほ場整備事業(経営体育成型)巻東町地区に伴う島灘瀬遺跡第5次発掘調査報告書 —



2016

新潟市教育委員会

## 例 言

- 1 本書は新潟県新潟市西蒲区巻東町小寺潟に所在する島灘瀬<sup>しまなだせ</sup>遺跡（新潟市遺跡番号 623）の発掘調査記録である。
- 2 調査は県営ほ場整備事業（経営体育成型）巻東町地区に伴い新潟県から新潟市が受託した。新潟市教育委員会（以下、市教委という）が調査主体となり、新潟市文化スポーツ部文化財センター（以下、市文化財センターという）が補助執行した。
- 3 平成 27 年度に発掘調査と整理作業、平成 28 年度に報告書刊行を行った。発掘調査と整理作業の体制は第三章に記した。
- 4 発掘調査、出土品ほかの整理作業および報告書刊行作業の支援業務は株式会社吉田建設に、調査に伴う測量業務は株式会社オリスに委託した。
- 5 出土遺物及び調査・整理作業に係る記録類は、一括して市文化財センターが保管・管理している。
- 6 本書の作成・執筆・編集は遠藤恭雄（市文化財センター）と脇本博康（株式会社吉田建設）が行った。
- 7 執筆は第 I 章を遠藤、第 II・IV・V・VII 章第 2 節を脇本、第 III・VII 章第 1・3 節を遠藤・脇本が行った。なお、第三章第 4 図及び遺物観察表の作成は澤野慶子（市文化財センター）が行い、第 VI 章第 1 節～3 節を（株）火山灰考古学研究所、第 VI 章第 4 節を（株）加速器分析研究所に委託した。
- 8 本書で用いた写真は、遺跡写真は遠藤・脇本が、遺物写真は脇本が撮影した。但し、写真図版 1 は米軍（国土地理院発行）が撮影したものを使用した。
- 9 遺構図のトレースと各種図版作成・編集に関しては、有限会社不二出版に委託してデジタルトレースと DTP ソフトによる編集を実施し、完成データを印刷業者に入稿して印刷した。
- 10 調査成果の一部は平成 27 年度新潟市遺跡発掘調査速報会で公開しているが、本書の記載内容をもって正式な報告とし、内容に齟齬がある場合は、本書の記述をとるものとする。
- 11 調査から本書の作成に至るまで下記の方々・機関より御指導・御協力を賜った。ここに記して厚く御礼申し上げる。  
春日真実・小林昌二・小林 勝・笹澤正史・高橋耕平・中島栄一・松島悦子  
新潟県教育庁文化行政課・（公財）新潟県埋蔵文化財調査事業団・新潟県新潟地域振興局巻農業振興部・  
西蒲原土地改良区  
（所属・敬称略、五十音順）

## 凡 例

- 1 本書は本文・別表と巻末図版（図面図版・写真図版）からなる。
- 2 本書で示す方位は全て真北である。磁北は真北から西偏約7度である。掲載図面のうち、既存の地形図等を使用したものは、原図の作成者・作成年を示した。
- 3 写真図版1は米軍写真と「新潟市地形図」平成19年を組み合わせたものである。
- 4 本文中の註は各章の末尾に記した。引用文献は著者と発行年（西暦）を〔 〕中に示し、巻末に一括して掲載した（但し、第IV章は各節の末尾に記した）。
- 5 遺構番号は現場で付したものを用了。番号は遺構の種別ごとに付さず、通し番号とした。
- 6 土層の土色および遺物の色調観察は『新版 標準土色帖』〔小山・竹原1967〕2004年版を用了。
- 7 土器実測図の断面は、須恵器を黒塗り、それ以外を白抜きとした。トーンについてはその都度図版中に提示した。
- 8 土器実測図では全周の1/12以下のような遺存率の低いものについては、誤差があるため中軸線の両側に空白を設けた。
- 9 遺物の注記は島灘瀬遺跡の略記号「島灘瀬」とし、出土地点や層位を続けて記した。略記号の前には「15」を付し2015年を表した。
- 10 遺物番号は土器・土製品・石製品を含めて通し番とし、本文および観察表・写真図版の番号は同一番号とした。
- 11 遺構・遺物観察表中における（ ）付きの値は、推定値を意味する。
- 12 遺構平面図での切り合い関係のある遺構の上端・下端の表現について、切られている遺構の場合、上端の復元が可能ならば破線、下端は切っている遺構より深度が深ければ実線、浅くても復元が可能であれば破線で示した。

# 目 次

第Ⅰ章 序 章 .....	1
第1節 遺跡概観 .....	1
第2節 発掘調査に至る経緯 .....	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境 .....	3
第1節 遺跡の位置と地理的環境 .....	3
第2節 周辺の遺跡と歴史的環境 .....	3
第Ⅲ章 調査の概要 .....	7
第1節 試掘・確認調査 .....	7
第2節 本発掘調査 .....	10
A 調査方法 .....	10
B 調査経過 .....	11
C 調査体制 .....	11
第3節 整理作業 .....	12
A 整理方法 .....	12
B 整理経過 .....	12
第Ⅳ章 遺 跡 .....	13
第1節 概 要 .....	13
第2節 層 序 .....	13
第3節 遺 構 .....	14
第Ⅴ章 遺 物 .....	16
第1節 概 要 .....	16
第2節 遺構出土遺物 .....	16
第3節 遺構外出土遺物 .....	17
第Ⅵ章 自然科学分析 .....	18
第1節 島灘瀬遺跡の土層 .....	18
第2節 島灘瀬遺跡における植物珪酸体（プラント・オパール）分析 .....	19
第3節 島灘瀬遺跡における花粉分析 .....	23
第4節 島灘瀬遺跡出土試料のAMS法による放射性炭素年代測定 .....	27
第Ⅶ章 総 括 .....	30
第1節 島灘瀬遺跡の出土土器について .....	30



第2節 島灘瀨遺跡の性格	32
別表	34
引用・参考文献	35
報告書抄録・奥付	巻末

### 挿図目次

第1図 島灘瀨遺跡周辺地形分類図 (1/150,000)	4	第8図 島灘瀨遺跡における植物珪酸体 (プラント・オパール)の顕微鏡写真	22
第2図 島灘瀨遺跡周辺の縄文時代～古代の遺跡分布	5	第9図 島灘瀨遺跡における花粉ダイアグラム	24
第3図 島灘瀨遺跡試掘・確認調査位置図・ 土層柱状図	8	第10図 島灘瀨遺跡における花粉・胞子・寄生虫卵	26
第4図 試掘・確認調査出土土器実測図・遺物観察表	9	第11図 島灘瀨遺跡の暦年較正年代グラフ	29
第5図 遺構形態模式図	14	第12図 高杯C類が出土した新潟県内の遺跡	30
第6図 島灘瀨遺跡の土層柱状図	18	第13図 新潟県内の遺跡から出土した高杯C類	31
第7図 島灘瀨遺跡における植物珪酸体 組成ダイアグラム	21	第14図 島灘瀨遺跡周辺の旧地形	33

### 表目次

第1表 島灘瀨遺跡調査履歴	2	第5表 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、 暦年較正用 $^{14}\text{C}$ 年代、較正年代)	29
第2表 島灘瀨遺跡における植物珪酸体分析結果	20	第6表 新潟県内の遺跡から出土した高杯C類観察表	31
第3表 島灘瀨遺跡における花粉分析結果	25		
第4表 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$ 補正值)	29		

### 別表目次

別表1 遺構計測表	34	別表3 土製品観察表	34
別表2 土器観察表	34	別表4 石製品観察表	34

### 図版目次

図版1 周辺の旧地形図 (1/50,000)	図版5 島灘瀨遺跡遺構全体図 (1/60)・基本層序図 (1/60)・遺構実測図 (1/40)
図版2 島灘瀨遺跡と周辺の古代の遺跡	図版6 島灘瀨遺跡出土遺物 (土器・土製品・石製品)
図版3 島灘瀨遺跡確認調査位置図 (1/6,500)	
図版4 島灘瀨遺跡グリッド設定図 (1/6,500)	

### 写真図版目次

写真図版1 島灘瀨遺跡周辺空中写真	基本層序B下層北側 (南→北)
写真図版2 調査区遠景空中写真 (東→西) 調査区遠景空中写真 (南東→北西) 調査区遠景空中写真 (南西→北東) 調査区遠景空中写真 (北西→南東) 完掘全景空中写真 (東→西)	写真図版5 SK4土層断面・遺物出土状況 (西→東) SK4完掘状況 (西→東) SK8土層断面 (東→西) SK8完掘状況 (東→西) SK9遺物出土状況 (北東→南西)
写真図版3 完掘全景空中写真 (南→北) 完掘全景空中写真 (北→南)	写真図版6 SK9遺物出土状況 (南→北) SK9土層断面 (北東→南西) SK9完掘状況 (北東→南西) SK10土層断面・完掘状況 (東→西) SD1土層断面・完掘状況 (南東→北西) SD1土層断面・完掘状況 (東→西) SD2土層断面・完掘状況 (東→西) SD2完掘状況 (北→南)
写真図版4 着手前現況 (南→北) 着手前現況 (北→南) 基本層序A北側 (東→西) 基本層序A南側 (東→西) 基本層序C (東→西) 基本層序B北側 (東→西) 基本層序B南側 (東→西)	写真図版7 出土遺物

# 第 I 章 序 章

## 第 1 節 遺 跡 概 観

島灘瀨遺跡は、新潟市西蒲区（旧巻町）巻東町字上田 1168 ほかに所在する。昭和 54 年度以前に地元住民により、田面表土下 40 ～ 50cm で確認された遺跡である。昭和 54 年に新潟県教育委員会主催で行われた巻管内分布調査により、遺跡として周知化された。採集された遺物は土師器のみで、古墳時代の遺跡として登録されている。新潟市歴史文化課（以下市歴史文化課）によって平成 22・23 年に、県営ほ場整備事業に伴う確認調査が行われ、奈良・平安時代の遺物が出土し、範囲が拡大した。

当該地は越後平野のほぼ中央にあたり、西を西川、東側を中ノ口川に挟まれた沖積地内の自然堤防上に所在する。西にそびえる角田山東麓からは約 7.5km の距離にあり、遺跡範囲はおおよそ南北 350m、東西 500m に広がる。現地の標高は 1 ～ 2m で、現況は水田及び農道である。調査地の北西約 1km には、昭和 40 年代初頭まで鰐潟が広がっていた。鰐潟は、昭和 30 年に農林省金沢農地事務局干拓事業所が旧巻町に設置されて干拓事業に着手、同 41 年に潟面干拓を終了して姿を消している。

周辺では近年、複数の発掘調査が行われており、8 世紀前半と 9 世紀後半を主体とする集落跡とされる下新田遺跡〔龍田ほか 2015〕、平安時代の荘園関連と考えられる林付遺跡〔相田ほか 2012〕などの調査成果がある。また、旧鰐潟対岸に位置する大島橋遺跡では 7 世紀代の遺物が出土しており、飛鳥から平安時代にかけての遺跡が自然堤防上に点々と分布している。

## 第 2 節 発掘調査に至る経緯

平成 21 年度に、新潟市西蒲区巻東町区域における県営ほ場整備事業の計画が新潟地域振興局巻農業振興部（以下巻農業振興部）より市歴史文化課に知らされた。市歴史文化課は、巻農業振興部と協議を重ね、平成 22・23 年の 2 か年ではほ場整備予定全区域 79.2ha を対象とした試掘・確認調査を行うことで合意した。平成 22 年度はほ場整備予定区域の南側半分、約 40ha を対象とした。巻農業振興部より確認調査の依頼（平成 22 年 9 月 1 日付新振巻農第 382 号）があり、それを受けて平成 22 年 10 月 12 日から 23 日まで確認調査（着手届 平成 22 年 10 月 12 日付新歴 B 第 132 号の 2）を実施した（第 1 次調査）。調査の結果（終了報告 平成 23 年 1 月 25 日付新歴 B 第 132 号の 3）、149 カ所の試掘坑のうち 20 カ所で土師器・須恵器などの遺物が出土し、土坑・溝・小土坑が検出された。この結果から島灘瀨遺跡の範囲を南東側に拡張するとともに（平成 23 年 1 月 31 日付新歴 B 第 132 号の 9）、北陸自動車道東側で新たに「家掛遺跡」（平成 23 年 1 月 31 日付新歴 B 第 242 号 新潟市遺跡番号 748）が周知化された。平成 23 年度は主にほ場整備予定区域の北側半分、約 39.2ha を対象とした。巻農業振興部より確認調査の依頼（平成 23 年 8 月 19 日付新振巻農第 365 号）があり、これを受けて平成 23 年 10 月 5 日から 25 日まで確認調査（着手届 平成 23 年 10 月 5 日付新歴 B 第 107 号の 2）を実施した（第 2 次調査）。調査の結果（終了報告 平成 24 年 2 月 1 日付新歴 B 第 107 号の 3）、200 カ所の試掘坑のうち 8 カ所で平安時代の土師器・須恵器などの遺物が出土し、溝 3 条と小土坑 2 基が検出された。この結果から島灘瀨遺跡の範囲を北側に拡張するとともに（遺跡の範囲拡大 平成 24 年 2 月 17 日付新歴 B 第 107 号の 8）、島灘瀨遺跡の北側及び北西側で新たに確認された遺跡について「漆山上田遺跡」（新遺跡の発見 平成 24 年 2 月 17 日付新歴 B 第 203 号の 4 新潟市遺跡番号 750 番）、「潟前遺跡」（新遺跡の発見 平成 24 年 2 月 17 日付新歴 B 第 204 号の 4 新潟市遺跡番号 751 番）として周知化した。その後、

## 第2節 発掘調査に至る経緯

巻農業振興部と市歴史文化課で協議を進め、ほ場整備事業計画で用排水路の新規敷設工事部分について、遺跡残存状況の確認を行う目的で平成26年度に追加確認調査を行った。巻農業振興部より確認調査の依頼（平成26年9月22日付新振巻農第395号）を受けて平成26年11月18日から20日まで島灘瀨遺跡（着手届平成26年11月13日付新歴B第133号の2第3次調査）及び漆山上田遺跡の確認調査を実施した。調査の結果（終了報告平成26年11月28日付新歴B第133号の3）、8カ所の試掘坑のうち島灘瀨遺跡内の2カ所で溝2条と土師器が出土した。この結果を受けて平成27年度の稲刈取り後に本調査を行うことが決定した。

平成27年度に入り、新潟地域振興局長より新潟県教育委員会教育長あてに、文化財保護法94条の通知（平成27年4月22日付新振巻農第55号）が提出された。それを受けて、新潟県教育長から新潟県新潟地域振興局長あてに「工事を着手する前に発掘調査を実施する」旨の文化財保護法94条の指示文（平成27年6月2日付け教文第238号の2）が通知された。その後本調査対象範囲について遺跡残存状況の確認がさらに必要となり、巻農業振興部より確認調査の依頼（平成27年6月18日付新振巻農第169号）を受けて平成27年6月22・23日に追加確認調査（着手届平成27年6月19日付新歴F第17号の8第4次調査）を実施した。調査の結果（終了報告平成27年9月18日付新歴F第17号の9）、6カ所の試掘坑のうち2カ所で奈良・平安時代の土師器・須恵器が出土し、溝1条が検出された。この結果から本調査範囲を決定し、平成27年9月11日付新振巻農第315号で巻農業振興部より調査依頼を受け、平成27年11月18日付新歴F第17号の18で新潟県教育委員会教育長あてに文化財保護法第99条の規定による埋蔵文化財の発掘通知を提出して本調査を実施した（第5次調査）。

第1表 島灘瀨遺跡調査履歴

通算調査回数	調査年次	主な成果	調査種別	調査原因	担当	調査面積（）は対象面積	トレンチ番号	文献	新潟市調査番号
	1979年（S54）	分布調査以前に地元住民により発見された遺物から島灘瀨遺跡を古墳時代の遺物包蔵地として遺跡登録。	分布調査		県文化行政課 斉藤基生				
1次	1次 2010年（H22） 10.12～10.23	ほ場整備予定範囲の南側半分を対象とした確認調査。奈良・平安時代の遺物が出土した。島灘瀨遺跡の範囲を南東側に拡張、古墳時代・奈良・平安時代の遺跡とした。北陸自動車道より東側で新たに家掛遺跡を古代・中世の遺跡として登録。	確認調査	巻東町地区 ほ場整備事業	新潟市埋蔵文化財センター 立木宏明	670.5㎡ (40ha)	1T～ 149T		2010162
2次	2次 2011年（H23） 10.5～10.25	ほ場整備予定範囲の北側半分を対象とした確認調査。奈良・平安時代の遺物が出土し、島灘瀨遺跡の範囲を北側に拡張。島灘瀨遺跡北側に漆山上田遺跡・湯前遺跡を古代の遺跡として新たに登録。	確認調査	巻東町地区 ほ場整備事業	新潟市文化財センター 立木宏明	900㎡ (39.2ha)	150T～ 349T		2011134
3次	3次 2014年（H26） 11.18～11.20	遺跡残存状況確認のための調査。古代の溝1条を検出。	確認調査	巻東町地区 ほ場整備事業	新潟市歴史文化課 朝岡政康	43.41㎡ (46,129㎡)	350T～ 357T		2014187
4次	4次 2015年（H27） 6.22～6.23	遺跡残存状況確認のための追加確認調査。古代の溝2条を検出。部分的に本調査が必要と判断された。	確認調査	巻東町地区 ほ場整備事業	新潟市文化財センター 遠藤恭雄	25.12㎡ (400㎡)	358T～ 363T		2015138
5次	5次 2015年（H27） 11.18～12.24	古代の土坑4基・溝1条、土師器・須恵器、石製品が出土。	本調査	巻東町地区 ほ場整備事業	新潟市文化財センター 遠藤恭雄	59.9㎡		[本書]	2015003

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 第1節 遺跡の位置と地理的環境（第1図、図版1）

新潟市は越後平野のほぼ中央に位置している。越後平野は海岸部の砂丘地帯、南西側の角田・弥彦山塊、南東側の新津丘陵に囲まれており、福島県から流れて日本海に至る阿賀野川や、長野県から流れて日本海に至る信濃川など、大小の河川によって形成された沖積平野である。越後平野西部の信濃川、北部の阿賀野川や、信濃川支流の中ノ口川の蛇行帯には自然堤防が発達しており、自然堤防に囲まれた後背湿地が広く分布する。これらの水はけの悪い後背湿地では低い部分に湛水して大潟・田潟・鎧潟・田ノ潟・乳ノ潟・六字潟・佐潟・御手洗潟などの潟湖が形成された。

今回調査した島灘遺跡は、越後平野中央部の旧鎧潟の南西に広がる沖積地の微高地に位置している。鎧潟は、干拓前はおおよそ南北2.4km・東西3km・面積は約270ヘクタールの規模を有していた。流入する河川が飛落川・新木山川・大通川の三川であるのに流出する河川が新川のみであったため、大雨の度に湛水して周囲に水害をもたらしたといわれている〔新潟県教育委員会・巻町教育委員会1966〕。その起源としては、平安時代中期の康平3年（1060）に作られたといわれている『康平絵図』にすでに「寄る潟」として記されており、この名称が鎧潟の古名である可能性が指摘されている〔古俣1989〕。また、鎧潟という名称は、寛延3年（1750）に記された『鎧八幡宮御由緒調査書』によれば、平安時代中頃の康平5年（1062）に源義家が鎧を本遺跡から約4km北西に所在する鎧八幡宮に奉納したという伝説に由来するものとされている。文化12年（1815）に阿賀野市水原町の小田島允武によって著わされた『越後野志』によれば、「巻ノ東ニ在、古ヘ萱野ナリシガ、文禄以前洪水ノ時、三方ヨリ河水流入テ潟トナル」とあり、文禄年間（1593～1596年）以前の洪水の際に三方から水が押し寄せて一夜にして成立したという説が紹介されているが詳細は不明である。このように、度々水害をもたらした鎧潟であったが、江戸時代後期の文政3年（1820）に「三潟水抜」といわれる大潟・田潟・鎧潟をつなぐ新川を開削して日本海に流す事業が行われ、これ以降水害は激減し周囲の新田開発が進んだといわれている〔斎藤1967・1968〕。鎧潟は昭和30年代から10年の歳月をかけて国営事業として干拓工事が行われ、現在は水田となっている〔北陸農政局鎧潟干拓建設事業所1968a〕。

### 第2節 周辺の遺跡と歴史的環境（第2図、図版2）

島灘遺跡周辺は、古代には蒲原郡に属している。古代蒲原郡は、近代の中・西・南蒲原郡を合わせた範囲であったと考えられている。10世紀に成立した『倭名類聚抄』には、蒲原郡内には「日置・桜井・勇礼・青海・小伏」の5郷が存在していたとされている。そのうち「桜井郷」は、弥彦村内に桜井という地名があることから、弥彦村付近であり、「勇礼郷」は三条市付近、「青海郷」は加茂市付近に比定されている。小伏郷・日置郷については不明とされているが、本遺跡から約3km南東に所在する下新田遺跡から「日置」と書かれた墨書土器が出土しており、日置郷がこの周辺にあった可能性がある〔龍田ほか2015〕。また、延長5年（927）の『延喜式』神名帳に蒲原郡内の式内社としては「青海（2座）・宇都良波志・伊久礼・槻田・小布施・伊加良志・伊夜比古（弥彦）・長瀬・中山・旦飯野・船江・土生田」などの12社13座が記されている。特に伊夜比古（弥彦）神社は、越国唯一の名神大社という社格の高い神社である。

ここでは、周辺の縄文時代から古代（奈良・平安時代）の遺跡分布状況などについて概観する（第2図）。





新潟県 1973・74・75「土地分類基本調査図(新潟、内野、弥彦、新津)」(1/50,000)をもとに作成

第1図 島瀬遺跡周辺地形分類図





明治44年測量図から復元した湯湖 (国土地理院 内野・新湯・弥彦・新津 1/50,000を縮小)

No.	名称	時代	No.	名称	時代	No.	名称	時代	No.	名称	時代
1	親仁山遺跡	平安・中世	19	茶畑遺跡	縄文・平安・中世	37	弥佐工門遺跡	平安	56	堤遺跡	平安
2	女池稲荷遺跡	平安	20	神山遺跡	縄文・弥生	38	土手内遺跡	平安	57	高畑遺跡	平安
3	駒首湯遺跡	平安	21	屋敷添遺跡	弥生・平安	39	味方排水機場遺跡	縄文	58	ハガヤバ遺跡	平安
4	下等別当遺跡	平安・中世	22	前田遺跡	弥生・古墳・平安・中世・近世	40	味方用水路遺跡	平安	59	西萱場遺跡	弥生
5	長沼遺跡	平安・中世	23	屋敷浦遺跡	弥生・奈良・平安	41	千日遺跡	平安	60	兵蔵遺跡	弥生・中世
6	西沼遺跡	平安	24	大藪遺跡	縄文・古墳～中世	42	骨田遺跡	平安	61	六枚田遺跡	平安
7	長左工門沼遺跡	平安	25	大原遺跡	平安	43	樋切遺跡	平安	62	下新田遺跡	奈良・平安
8	川根遺跡	奈良・平安・中世	26	山田屋敷遺跡	平安・中世	44	与平湯遺跡	平安・中世	63	道上荒田遺跡	平安・中世・近世
9	浦興野遺跡	古代	27	釈迦堂遺跡	平安・中世	45	六十歩下遺跡	平安・中世	64	仲歩切遺跡	奈良・平安・中世
10	横川浜堤外地遺跡	縄文・古代・中世	28	三町歩遺跡	平安	46	三條田遺跡	平安	65	万坊江遺跡	平安・中世
11	大沢谷内遺跡	縄文～中世	29	中才遺跡	平安	47	西前田遺跡	平安	66	高六遺跡	平安・中世
12	的場遺跡	縄文～中世	30	浦田遺跡	古墳・平安	48	四ツ割遺跡	平安	67	古辻・助次郎遺跡	平安・中世
13	緒立遺跡	縄文～中世	31	漕上り遺跡	平安	49	沼下遺跡	平安	68	湯前遺跡	奈良・平安
14	六地山遺跡	弥生・奈良・平安・中世	32	大島橋遺跡	古墳・平安	50	本田遺跡	平安	69	漆山上田遺跡	奈良・平安
15	茨曾根遺跡	平安・中世	33	なえびき橋遺跡	平安	51	浦A遺跡	平安	70	三角耕地遺跡	古代
16	四石遺跡	縄文～中世	34	五之上曾根上遺跡	平安	52	家掛遺跡	奈良・平安・中世	71	観音原遺跡	縄文
17	木山遺跡	平安・中世	35	味方曾根下遺跡	平安	53	島瀬瀬遺跡	古墳・奈良・平安	72	木山墓所遺跡	縄文
18	ヤマサキ遺跡	縄文・弥生・中世	36	ブリ遺跡	平安・中世	54	林付遺跡	平安・中世・近世	73	下曲江内遺跡	縄文
						55	浦B遺跡	平安	74	新道遺跡	奈良

※7世紀の遺跡は古墳時代に含む

第2図 島瀬瀬遺跡周辺の縄文時代～古代の遺跡分布 (『林付遺跡 2012』を改変)

**縄文・弥生時代の遺跡** 越後平野南西端の角田・弥彦山麓と、南東端の東山・新津丘陵と西側の海岸部分の砂丘周辺に分布しており、沖積地での遺跡の確認例はわずかである。砂丘列に沿って分布する遺跡は、的場遺跡(12)・緒立遺跡(13)・六地山遺跡(14)・四十石遺跡(16)などである。また、沖積地に分布する遺跡として、横川浜堤外地遺跡(10)・大沢谷内遺跡(11)・味方排水機場遺跡(39)などがある。

このなかで、味方排水機場遺跡(39)〔寺崎ほか2000〕においては、昭和39年の排水機場建設工事の際に現地表面から19m下で縄文時代中期後葉～後期前葉の深鉢形土器の胴部が出土しており、越後平野の地盤沈降を示す事例として注目されている。信濃川沿いに位置する横川浜堤外地遺跡(10)〔新潟市国際文化部歴史文化課2007〕からは縄文時代中期前葉の土器が少量出土している。大沢谷内遺跡(11)〔川上1989、前山2012、細野・伊比ほか2012〕からは縄文時代晩期中葉と弥生時代後期の遺物が出土している。また、砂丘列と沖積地の境に位置する六地山遺跡(14)〔寺村1960・1961、新潟市国際文化部歴史文化課2007〕からは弥生時代後期前半の東北系の土器とアメリカ式石鏃が北陸系土器と共伴して出土した。これらの遺跡はいずれも小規模で、縄文・弥生時代を通じて沖積地においては大規模な集落遺跡は確認されていない。

**古墳時代の遺跡** 角田山麓においては、古墳時代後期で集落が一旦廃絶するという状況が御井戸B遺跡において報告されている〔前山・相田2003、2004〕。6世紀代には沖積地において遺跡は確認されていないが、7世紀になると大島橋遺跡(32)・大沢谷内遺跡(11)・燕市大橋遺跡〔布施・中川2002〕などで一定量の遺物が出土しており、沖積地に集落が出現し始めるようになる。特に大島橋遺跡(32)では、昭和35年に鎧潟の干拓に伴う飛落川の付け替え工事の際に発見された遺跡で、2枚の文化層があり、下層からは土師器のみが出土し、上層からは土師器と須恵器が混在して出土したという報告がなされている〔山口1984〕。出土した土師器(高杯・甕・鉢)は7世紀後半代と考えられている。

**古代(奈良・平安時代)の遺跡** 沖積地内における8世紀代の遺跡としては、新道遺跡(74)〔相田2015〕・川根遺跡(8)・下新田遺跡(62)〔龍田ほか2015〕・仲歩切遺跡(64)〔龍田2016〕・古辻・助次郎遺跡(67)などがあり、遺跡数は確実に増加する。9世紀代になると、さらに遺跡数は増加し、砂丘地では四十石遺跡(16)〔渡邊ほか2012〕・的場遺跡(12)・緒立遺跡(13)・六地山遺跡(14)、沖積地では釈迦堂遺跡(27)〔江口ほか2000〕・林付遺跡(54)〔相田ほか2012〕・駒首潟遺跡(3)〔渡邊ほか2009〕・大沢谷内遺跡(11)などが知られる。これらの遺跡の多くで発掘調査が行われている。

また、第2図の範囲を外れるが、新潟市の南側に隣接する燕市には小諏訪前遺跡〔布施ほか2006〕・三角田遺跡〔松島2001〕・大橋遺跡〔布施・中川2002〕など、7世紀末～9世紀にかけての遺跡が点在する。

**島灘瀨遺跡に隣接する巻東町集落について** 島灘瀨遺跡に隣接する巻東町集落は、昭和33年に古志田・寺瀨・下郷屋の三集落が合併して巻東町となったことにより始まる。合併前の集落の成立は、集落の南に位置する漆山村が弥彦荘に属する中世以来の本田村とされ、古志田・寺瀨・下郷屋の3村は江戸時代以降に本田村から分かれて成立した新田村である。各集落の成立の経緯を述べる。古志田村には、元和元年(1615)近江の国佐々木氏出身の金津小次郎が浄源寺を創建したとする記録が残っている〔田辺ほか2002〕。それによると浄源寺は寛文元年(1661)に中之口村東船越に移転して、現在も金津山浄源寺として続いているとのことである。移転理由としては、流れ床の地であったためといわれており、この当時から鎧潟縁辺は洪水などを繰り返して住みづらい場所であったことがわかる。古志田村・下郷屋村の漆山村からの分村は『西蒲原郡志』〔西蒲原郡教育会1973〕によれば享和元年(1801)であるといわれている。また、寛延2年(1662)に作成された『漆山絵図』によれば、鎧潟縁辺に3村が所在していることが記されている。各集落には、古志田村に神明神社、寺瀨村に諏訪神社、下郷屋村に二荒山神社というように一社ずつ神社があったが、現在は合祀され東町神社として旧寺瀨村の諏訪神社のあった場所に所在している。また、昭和23年の米軍撮影の航空写真(写真図版1)によれば、集落の周辺には掘り上げ田が広がっている様子がわかる。また、集落の耕地の区割整理は昭和34年に行われ、現在の姿に近いものとなった〔田辺ほか2002〕。



## 第Ⅲ章 調査の概要

### 第1節 試掘・確認調査（第3・4図、第1表、図版3）

巻東町地区ほ場整備事業（以下、ほ場整備事業）に伴う試掘・確認調査を4回実施した（島灘瀨遺跡第1～4次調査、以下、第1～4次調査）。試掘坑配置図・柱状図を第3図・図版3に、試掘確認調査出土土器実測図・観察表を第4図に示した。以下、本章において遺物に伴う番号は第4図の遺物番号を示す。なお、墨書土器墨痕の図化にあたっては、小林昌二氏（新潟市歴史博物館館長）よりご教示いただいた。調査はバックホウで表土から徐々に掘削した後、人力により精査を行い、遺構・遺物の有無と土層堆積状況を記録した。試掘坑の大きさは概ね1.5×2.0～3.0mである。

第1次調査は、ほ場整備予定区域の南側半分、約40haを対象とし平成22年10月12日から23日までの延べ10日間実施した。149カ所の試掘坑（1T～149T）を調査した結果、20カ所の試掘坑で遺構・遺物を確認した。遺構は黒茶色～灰褐色シルト層（Ⅱb層）下面の現地表下0.2～0.5mで検出され、内容は土坑2基、溝4条、性格不明遺構2基、小土坑13基である。遺物は主にⅡb層で出土しており、従来の島灘瀨遺跡範囲に近い53Tで非ロクロ成形の土師器煮炊具が出土している（1～3）。北陸自動車道西側の85Tで出土した須恵器無台杯（5）は9世紀代の所産と考えられ、東側の103・128Tでは古代の土師器・須恵器が比較的まとまって出土している（8～10）。以上の結果から島灘瀨遺跡の範囲を南東側に拡張するとともに、北陸自動車道東側で新たに家掛遺跡を周知化した。

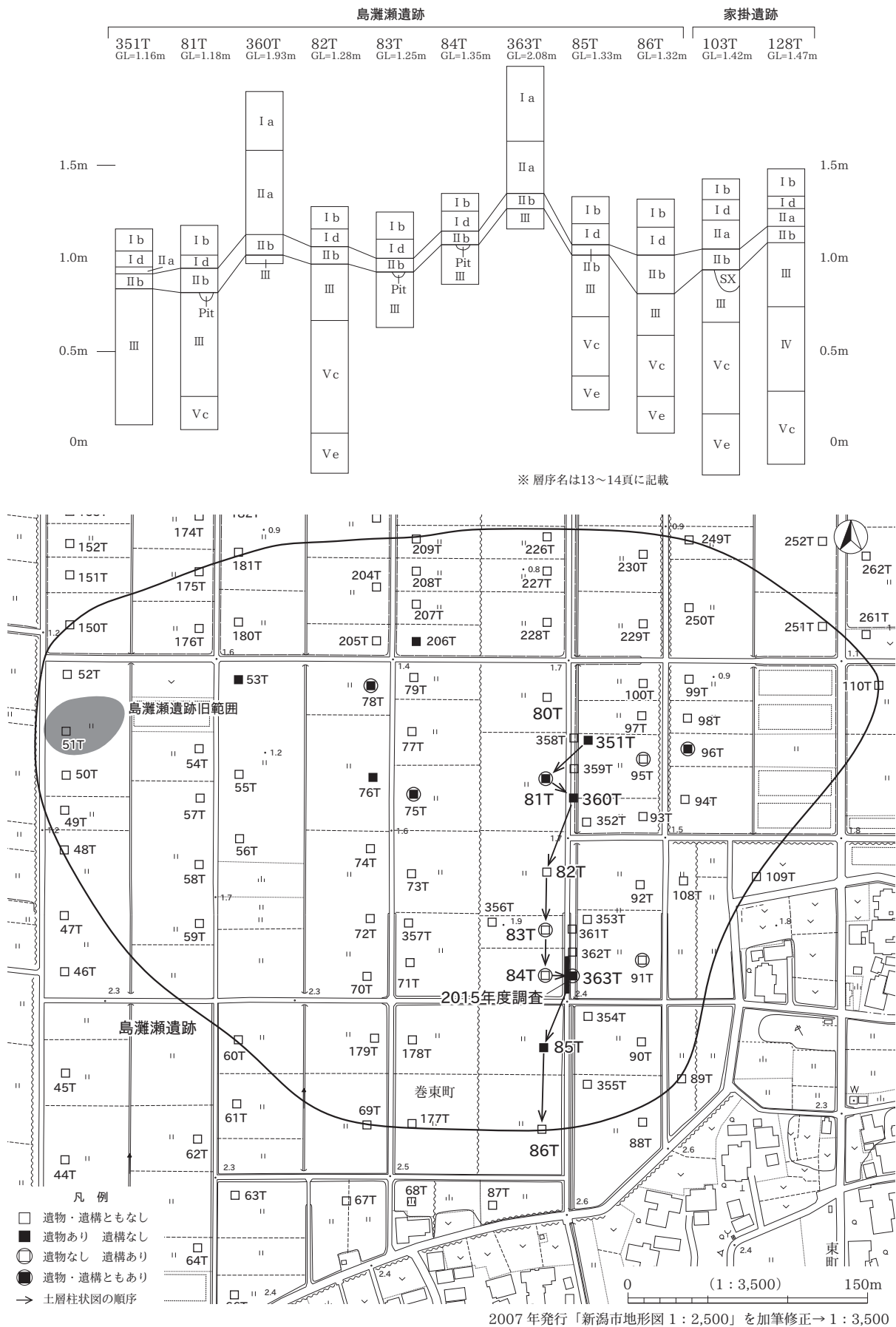
第2次調査は、主にほ場整備予定区域の北側半分、約39.2haを対象として平成23年10月5日から25日までの延べ14日間実施した。200カ所の試掘坑（150T～349T）を調査した結果、8カ所の試掘坑で平安時代の土師器・須恵器などの遺物が出土し、溝3条と小土坑2基が検出された。出土層位は第1次調査と同様である。

188Tでは溝1基、土師器9点、須恵器5点が出土している。須恵器無台杯3点を図化した（11～13）。いずれも溝埋土からの出土である。11はほぼ完形で、底部外面に墨書・墨痕が認められる。文字は判読できない。胎土精良で1mm以下の細かい石英・長石を含む。新津丘陵窯産の可能性が高い。12・13はいずれも器壁が薄く胎土は精良である。佐渡小泊窯跡群産で9世紀後半代に位置付けられよう。13は底部外面に墨痕が認められる。14は土師器小甕で、底部に糸切りの痕跡を残す。図化していないが、ほ場事業範囲北西端の265Tではロクロ成形の土師器煮炊具が出土している。以上の結果から島灘瀨遺跡の範囲を北側に拡張するとともに、島灘瀨遺跡の北側及び北西側で新たに確認された遺跡について漆山上田遺跡、潟前遺跡として周知化した。

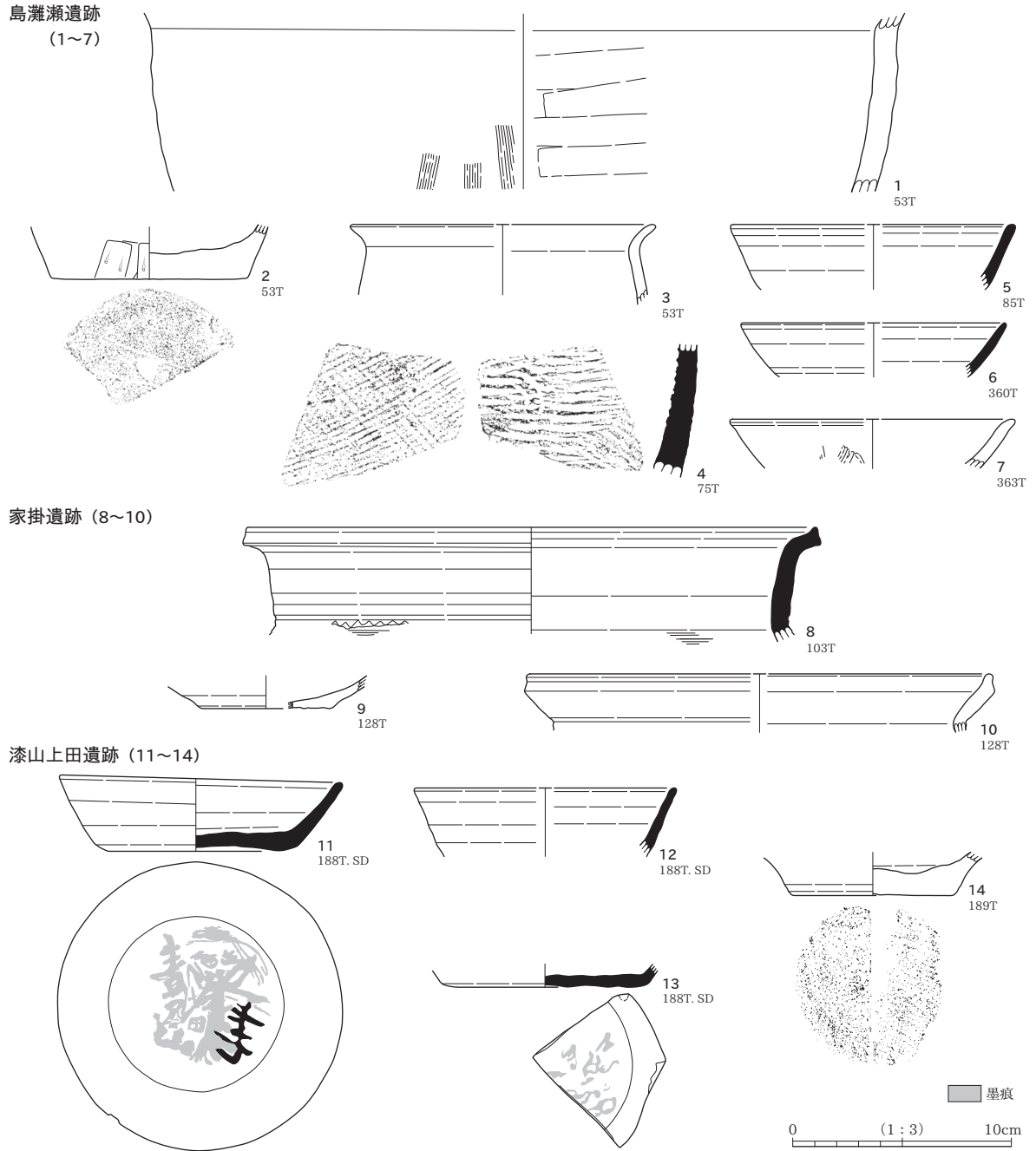
第3・4次調査は、第1・2次調査で把握された遺跡範囲において、ほ場整備事業計画で用排水路の新規敷設工事に伴って掘削が予定される部分について遺跡残存状況の確認を行う目的で実施した。第3次調査は、46,129m<sup>2</sup>を対象として平成26年11月17日から20日の4日間、第4次調査は、用排水路設置工事予定地の農道400m<sup>2</sup>を対象に平成27年6月22・23日の2日間実施した。設定した試掘坑は、第3次調査が8カ所（350T～357T）、第4次調査6カ所（358T～363T）である。調査範囲のほぼ全域で水田部では田面から0.1～0.3m、農道部分では表土から0.6～0.7mの深度で遺物包含層相当層（Ⅱb層）の残存が認められ、356T・360T・363Tで古代の遺物が出土した。351T・363TではⅡb層下面で溝を検出した。6は、360TⅡb層で出土した須恵器無台杯である。佐渡小泊窯跡群産と推定される。7は363Tで南東から北西に延びる溝の埋土で出土した土師器杯である。口縁部がやや外反し、内面にミガキ調整が確認される。

以上の結果から、平成27年度にほ場整備工事が予定される第4次調査範囲では、362T以北で近世より古





第3図 島灘瀬遺跡試掘・確認調査位置図・土層柱状図



No.	出土位置		種別	器種	法量 (cm)			手法			備考
	トレンチ	遺跡名			口径	底径	器高	外面	内面	底部	
1	53T	島灘瀬遺跡	土師器	鍋				ナデ・ハケメ	ナデ		非ロクロ成形
2	53T	島灘瀬遺跡	土師器	小甕		9.0		ヘラケズリ	ヘラナデ		底部外面ヘラ記号「=」 非ロクロ成形
3	53T	島灘瀬遺跡	土師器	小甕 (14.0)				ナデ	ナデ		非ロクロ成形
4	75T	島灘瀬遺跡	須恵器	大甕				平行タタキメ	平行・同心円当て具痕		
5	85T	島灘瀬遺跡	須恵器	無台杯 (12.8)				ロクロナデ	ロクロナデ		
6	360T	島灘瀬遺跡	須恵器	無台杯 (12.0)				ロクロナデ	ロクロナデ		重ね焼痕あり、佐渡小泊窯産
7	363T	島灘瀬遺跡	土師器	杯 (13.0)				ミガキ	ナデ		
8	103T	家掛遺跡	須恵器	大甕	26.0			ロクロナデ・ハケメ	ロクロナデ・ハケメ		
9	128T	家掛遺跡	土師器	無台椀		6.0		ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	磨耗
10	128T	家掛遺跡	土師器	長甕 (21.0)				ロクロナデ	ロクロナデ		
11	188T	漆山上田遺跡	須恵器	無台杯	12.8	8.0	3.5	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り (右)	SD出土、底部外面墨書「口」・墨痕
12	188T	漆山上田遺跡	須恵器	無台杯	11.8			ロクロナデ	ロクロナデ		SD出土
13	188T	漆山上田遺跡	須恵器	無台杯		8.0		ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り (右)	SD出土、底部外面墨痕 佐渡小泊窯産
14	189T	漆山上田遺跡	土師器	小甕		7.2		ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り (右)	

第4図 試堀・確認調査出土土器実測図・遺物観察表

い遺構は確認されず、遺物の出土も極めて少ないことから、工事掘削に伴う遺跡への影響は軽微と判断された。363Tを中心とする幅2m、延長26.5m、面積54m<sup>2</sup>の範囲については、記録保存のための本発掘調査を実施し、それ以外の部分は工事立会を行うこととなった。

## 第2節 本発掘調査

### A 調査方法

#### 1) 調査前の状況

調査範囲の大半は、水田耕作地中の農道として利用されていた。農道は、昭和34年の区割整理によって設置され、それ以前は、昭和23年の米軍撮影写真(写真図版1)によれば水田耕作地として利用されていた。現標高は調査区の北東隅で1.5mである。

#### 2) グリッドの設定(図版4)

巻東町地区県営ほ場整備事業予定地全域を覆うグリッドを設定した。今回の調査地点の約1.1km北西の漆山排水機場脇を調査基準点として1A-1A杭とした。1A-1A杭は、X座標:196,000.000、Y座標:38,000.000、緯度:北緯37°45′55.9557″、経度:東経138°55′52.7324″(測地成果2011)である。また、基準点に対して国土地理院の第Ⅷ系座標軸を用いて10mの方眼を組み、これを大グリッドとした。

大グリッド名称は北西隅の1A-1A杭を起点として南北方向をアラビア数字、東西方向をアルファベットとし、この組み合わせによって表示した。大グリッドは10mの方眼に区分して1から100の中グリッドに分割し、さらに2m方眼に区分して1から25の小グリッドに分割し、「11F-4H25」のように呼称・表示した。基準杭の打設は測量業者に委託した。

発掘調査区の座標は次のとおりである。

11F-4H(X座標:194,970.000、Y座標:38,570.000、Z座標:1.082、緯度:37°45′22.4596″、経度:138°56′15.8258″)

11F-5H(X座標:194,960.000、Y座標:38,570.000、Z座標:1.183、緯度:37°45′22.1353″、経度:138°56′15.8239″)

11F-5H杭で長軸方向を座標北の0度0分0秒とし、座標北は真北に対して0度16分05秒東偏し、磁北は真北に対し7度53分西偏する。

#### 3) 調査方法

①表土掘削:これまでの試掘・確認調査の成果から、遺構形成面がⅢ層以下にあることが判明していたため、Ⅰ層(農道の造成に伴う盛土)・Ⅱ層(水田耕作層・包含層相当層)を遺物の出土などに注意しながら、Ⅲ層上面まで重機(バックホウ)により除去した。排土は、調査区南側の農道上に仮置きした。また、湛水防止のため、表土掘削と並行して調査区の西壁から20cmほど離して幅20cm程度の土側溝を掘り2吋のポンプで強制排水を行った。

②包含層掘削・遺構検出・発掘:重機で表土除去の後、ジョレン等を用いて人力で精査を行い、包含層の掘削・遺構の検出にあたった。排土は人力で調査区外に搬出した。

③実測・写真:実測図は断面図を1/20で作成した。平面図や各種測量点は測量業者に委託してトータルステーションを用いて作成し、あわせて俯瞰写真を撮影した。写真撮影は35mm版、6×7版のフィルムカメラおよびデジタル一眼レフカメラを用い、白黒フィルム・カラーポジフィルムを適宜併用した。

④遺物取り上げ:包含層出土遺物は小グリッド単位として取り上げた。遺構出土遺物は点数が少ない地点が多く、層位ごとに一括で取り上げた。また、遺物密集地点や重要遺物についてはトータルステーションを併用した。

⑤自然科学分析:土壌分析・植物珪酸体分析・放射性炭素年代測定(AMS法)の科学分析を行った。

## B 調査経過

平成27年11月16日から諸準備を開始した。農道乗り入れ・水田の使用等の協議を行い、準備工として、11月17日に調査前撮影、11月18日～19日に調査事務所用地の川砂入れ、PPシート養生、敷鉄板の搬入・設置を行った。11月21日にプレハブ・機材倉庫、11月24日に重機・クローラードンプを搬入した。11月25日に調査区脇に敷鉄板を敷設し、川砂を搬入した。

11月26日から重機によって表土を除去する作業を調査区北側より開始。調査区南端までを12月1日まで行った。重機掘削と並行して作業員約5名で排水路掘削、法面仕上げおよび遺構検出準備作業を開始した。12月2日より、調査区北側から包含層掘削および遺構検出作業を開始した。遺構の掘削・写真撮影・計測は12月3日より開始した。

12月8日までにほぼ遺構の調査を終了し、空撮に備えた清掃作業を同日行い、12月9日にラジコンヘリコプターおよび高所作業車による調査区全体の撮影を行った。全景撮影後は、12月10日に調査の補足を行い、12月11日には(株)火山灰考古学研究所の早田勉氏に依頼して、自然科学分析のサンプリングを行った。12月12日に遺構測量を行った。12月14日には土層確認のためトレンチ1・2を掘削した。同日、巻農業振興部と引き渡し協議を行い、現地調査を終了した。調査終了後に12月17日までに調査区の埋め戻し作業と調査区脇の畦畔・水路の復旧を行った。12月18日～24日までプレハブ・倉庫・トイレなどを撤去し、駐車場用地の復旧を行い12月25日に巻農業振興部への現場引き渡しを行った。

最終的な発掘調査面積は、上端面積 59.9m<sup>2</sup>、下端面積 46.8m<sup>2</sup>である。

## C 調査体制

### 【平成22年度 第1次調査（確認調査）】

調査主体	新潟市教育委員会（教育長：鈴木廣志）
所管課	新潟市文化・観光スポーツ部歴史文化課 （課長：倉地一則 課長補佐：頓所洋一 埋蔵文化財係長：渡邊朋和）
事務局	新潟市埋蔵文化財センター（所長：山田光行 埋蔵文化財係長兼主任：渡邊朋和）
調査員	調査担当 立木宏明（新潟市埋蔵文化財センター主査） 調査員 今井さやか（同主査）

### 【平成23年度 第2次調査（確認調査）】

調査主体	新潟市教育委員会（教育長：鈴木廣志）
所管課	新潟市文化・観光スポーツ部歴史文化課 （課長：倉地一則 課長補佐：佐藤正昭 埋蔵文化財係長：廣野耕造）
事務局	新潟市文化財センター（所長：高橋 保 所長補佐：丸山徳幸 主任：渡邊朋和）
調査員	調査担当 立木宏明（新潟市文化財センター主査） 調査員 八藤後智人（専門臨時職員）

### 【平成26年度 第3次調査（確認調査）】

調査主体	新潟市教育委員会（教育長：阿部愛子）
所管課	新潟市文化スポーツ部歴史文化課 （課長：渡辺幸子 課長補佐：拝野博一 埋蔵文化財担当主幹：廣野耕造）
事務局	新潟市文化スポーツ部文化財センター （所長：中野俊一 所長補佐：福地康郎 主任：遠藤恭雄）
調査担当	朝岡政康（歴史文化課主査）

【平成27年度 第4次調査（確認調査）第5次調査（本調査）】

調査主体	新潟市教育委員会（教育長：前田秀子）
所管課・事務局	新潟市文化スポーツ部歴史文化課 （課長：渡辺幸子 課長補佐：拝野博一 埋蔵文化財担当主幹：廣野耕造） 新潟市文化スポーツ部文化財センター （所長：中野俊一 所長補佐：福地康郎 主任：遠藤恭雄）
調査担当	遠藤恭雄（新潟市文化財センター主任）
調査員	脇本博康（株式会社吉田建設）

## 第3節 整理作業

### A 整理方法

#### 1) 遺物

遺物量はコンテナ（内径54.5×33.6×10.0cm）にして1箱である。奈良・平安時代の土器・石製品などの遺物がある。

遺物の整理作業は次の手順で行った。①洗浄。②注記。③遺物の器種別の重量・個体数計測。④接合。⑤報告書掲載遺物の抽出。⑥実測図作成。観察表作成。⑦トレース図作成。⑧仮割付作成。⑨版下作成。このうち⑦と⑨は業者に委託してデジタル編集をした。

#### 2) 遺構

平面図を作成するにあたっては、まず測量業者に委託した1/20の遺構平面図と手取り断面図との校正作業を行った。報告書の1/80と1/40の遺構平面図は測量業者が作成し、デジタルデータとした。

### B 整理経過

平成27年度の発掘調査と並行して出土遺物の水洗を行った。現地調査終了後に本格的な報告書作成作業に入り、出土遺物の注記・計測・接合・実測作業と写真・図面整理、測量業者に委託した遺構平面図の校正、遺物写真の撮影、図版のレイアウト作業を支援業務受託した株式会社吉田建設が主体となって行った。報告書の執筆・編集作業は、市調査担当と株式会社吉田建設が行った。遺構平面図は測量業者作成のデジタルデータを用いた。各種図版のデジタルトレース等図版作成・編集作業は有限会社不二出版に委託した。自然科学分析については、株式会社火山灰考古学研究所と株式会社加速器分析研究所に委託した。

平成27年度の調査終了後の整理体制については、第2節の調査体制を継続した。

報告書の印刷刊行は平成28年度に行った。

## 第Ⅳ章 遺 跡

### 第 1 節 概 要

島灘瀬遺跡は、西を西川、東側を中之口川に挟まれた沖積地内の自然堤防上に立地する。現在の遺跡全体の標高は、農道や現水田面で 2.4 ～ 0.8m を測り、南東から北西にかけて緩やかに下がっていく。今回の調査地点は、島灘瀬遺跡の南限付近であるが、遺構確認面でも同様に傾斜しており標高 0.95 ～ 0.8m を測る。

検出された遺構は、土坑 4 基、溝 2 条、小土坑 (Pit) 3 基である。出土遺物から遺構の大部分が古代に属すると考えられるが、近世以降の遺構も若干みられる。調査区が狭小なため遺構全体を調査できず、一部分の調査に限られているものが多い。

遺物量はコンテナ (内径 54.5×33.6×10.0cm) 換算で 1 箱である。ほとんどが古代 (8 世紀前半から後半) の土師器であり、須恵器と近世以降の遺物も若干認められる。

### 第 2 節 層 序 (図版 5、写真図版 4)

基本層序は確認調査の成果を元にⅠ～Ⅲ層の 3 層に大別した。調査区の北側と南側とではグライ化の度合い等により色調に若干の相違が生じているが、共通の認識のもとに分層した。Ⅰ層は農道造成に伴う盛土及び旧水田耕作土である。色調・含有物により 5 層に細分した。Ⅱ層は確認調査の際に検出された奈良・平安時代の遺物包含層に相当する層である。調査区が現在の農道の直下であり、東側に水道管が埋設されているために大きく攪乱を受けており、北側の一部で確認されたのみで、南側においては確認出来なかった。また、包含層からの遺物の出土はほとんどなく、遺物の出土は遺構に伴うものが大半であった。Ⅲ層は、遺構確認面で南側と北側でグライ化の度合いが異なるため、色調にある程度幅を持たせたが、含有物の観察から同じ層であると認識している。Ⅲ層以下については、遺構調査終了後にトレンチを 2 か所設置して標高 0.18 ～ 0.03m まで深掘りを行ったが、土層の変化はなかった。遺構確認面までの深度は、現地表面の標高 2.4m から、最も浅い調査区中央部分で 1.45m、最も深い調査区南側の SK9 付近で 1.6m である。遺構確認面は、グライ化したシルトであり、湛水を繰り返した土地であったことが考えられる。

I a 層 表土、路盤碎石層。層厚 0.4m 程度。

I b 層 褐色シルト (7.5YR4/3) 粘性強く、しまりあり。黄灰色シルトを塊状に多量含む。層厚 0.13 ～ 0.4m。旧水田耕作土である。

I c 層 緑灰色シルト (5G5/1) 粘性強く、しまりあり。黄灰色シルトを塊状に多量含む。層厚 0.05 ～ 0.2m。全体的に攪乱を受けている旧水田耕作土である。

I d 層 暗緑灰色シルト (5G4/1) 粘性強く、しまりあり。緑灰色砂を斑状に少量含む。層厚 0.04 ～ 0.2m。旧水田耕作土である。

I e 層 褐灰色シルト (10YR4/1) 粘性強く、しまりあり。黄灰色シルトを斑状に多量含む。層厚 0.3 ～ 0.11m。旧水田耕作土である。

Ⅱ 層 黒褐色シルト (10YR3/2) 粘性強く、しまりあり。灰オリーブ色シルトを斑状に少量含む。層厚 0.03 ～ 0.12m。確認調査における遺物包含層 (Ⅱb 層) に相当する層である。

Ⅲ 層 灰オリーブ色～灰色シルト (5Y5/2 ～ 10Y5/1) 粘性強く、しまりあり。黄灰色シルトを斑状に多量含む。



黒褐色シルトを斑状に少量含む。層厚 0.3 ～ 0.9m 以上。深掘りトレンチ内では部分的に噴砂脈が確認できる。地山・遺構確認面であるが、上面は2層との漸移層（Ⅲa層）であり、遺物を含む。

※ 以下は試掘・確認調査検出層 ガツボ：未分解植物遺体や腐植物

Ⅳ 層 黒茶色シルト（ガツボ層）。

Va 層 青灰色～灰色シルト。

Vb 層 黒灰色シルト（一部ガツボ層）。

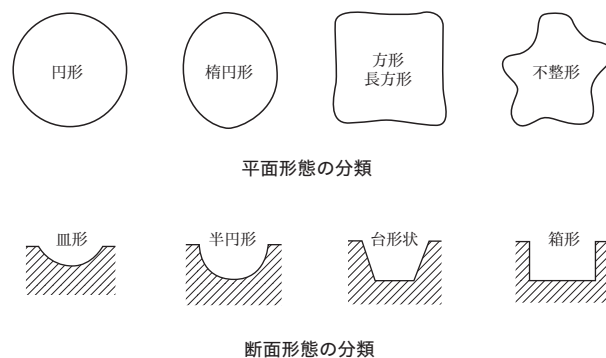
Vc 層 青灰色シルト＋青色砂の互層（一部ガツボ層）。

Vd 層 灰色～青灰色シルト（一部砂混じりガツボ層）。

Ve 層 青色砂。

### 第3節 遺 構 (図版5)

遺構番号は遺構の種別に関わらず通し番号を付したが、遺構でないと判断したものについては欠番とした。説明は種別ごとにし、土坑（SK）、溝（SD）、小土坑（Pit）の順に記す。今回の調査で検出された遺構数は土坑4基、溝2条、小土坑（Pit）3基である。遺構の形態分類は、土坑については大まかに円形・楕円形・方形・長方形・不整形の5種類に、断面形は皿形・半円形・台形状・箱形の4種類に分類し（第5図）、調査区外へ延びる遺構については可能な限り推測して記した。遺構の計測値等は別表1に記し、詳細な説明は一部省略している。



第5図 遺構形態模式図  
〔北村・菊地ほか2004〕から転載・一部改変

調査区内は標高 0.8 ～ 0.95m を測り、遺構は調査区の中央部分の標高 0.9 ～ 0.95m の範囲に集中しており、南側は遺構密度が希薄となる。調査面積は上端面積 59.9m<sup>2</sup>、下端面積 46.8m<sup>2</sup> である。

#### a 土 坑 (SK)

##### SK4 (図版5、写真図版5)

11F-4H11 に位置する。北側をSD1に切られ、南側をSD2に切られる。平面形は楕円形、断面形は皿形である。確認面で残存長軸 1.54m・短軸 1.0m・深さ 0.16m を測る。埋土は灰色シルトの単層であり、オリーブ灰色シルトブロックを斑状に含み、φ5～10mmの炭化物を中量含む。遺物は須恵器無台杯1点、土師器無台杯1点、短脚の高杯、小甕が2点出土している（図版6）。埋土から出土した炭化物の放射性炭素年代測定の結果、7世紀後葉～8世紀後葉の年代が得られている。

##### SK8 (図版5、写真図版5)

11F-5H11 に位置する。遺構の西側半分は調査区外へ延びている。平面形は楕円形と推定され、断面形は皿形である。確認面で長軸 0.9m・残存短軸 0.46m・深さ 0.21m を測る。埋土は灰色シルトの単層であり、オリーブ灰色シルトブロックを斑状に多量含み、φ5～20mmの炭化物を中量含む。遺物は土師器小甕が出土している（図版6）。埋土から出土した炭化物の放射性炭素年代測定の結果、7世紀末～8世紀前半の年代が得られている。

##### SK9 (図版5、写真図版5・6)

11F-5H11 に位置する。遺構の一部が調査区外の西側へ延びている。平面形は楕円形と推定され、断面形は皿形である。確認面で長軸 1.4m・短軸 0.58m・深さ 0.19m を測る。埋土は灰色シルトの単層であり、オリーブ

灰色シルトブロックを斑状に少量含み、 $\phi 5 \sim 10\text{mm}$ の炭化物を少量含む。遺物は土師器長甕が出土している(図版6)。

#### SK10 (図版5、写真図版6)

11F-4H11に位置する。遺構東側の一部を検出し西側の大部分は調査区外へ延びている。平面形は楕円形と推定され、断面形は皿形である。確認面で長軸0.51m・残存短軸0.35m、深さ0.12mを測る。埋土は黄灰色シルトの単層であり、Ⅲ層灰色砂質シルトブロックを斑状に多量含み $\phi 8 \sim 15\text{mm}$ の炭化物を少量含む。遺物は出土していない。

#### b 溝 (SD)

#### SD1 (図版5、写真図版6)

11F-4H1・6・11に位置する。主軸方位は南東～北西(N-63°-W)で、両端は調査区外へ延びる。南側でSK4を切る。断面形は皿形である。確認面での幅1.56m、掘り込み面からの深さ0.52mを測る。埋土は暗灰色・灰色シルトの2層に分けられる。I層から掘り込まれており、上層に近代の遺物が混入している。また、昭和23年米軍撮影写真(写真図版1)では、類似する位置と方向の農道及び水路が確認できることから、昭和30年代の耕地整理まで存在したものである可能性が高い。土師器高杯脚部の破片と長甕が出土している(図版6)。

#### SD2 (図版5、写真図版6)

11F-4H11・16・22に位置する。主軸方位は南東～北西(N-60°-W)で、両端は調査区外へ延びる。南東端部が確認調査(第4次調査)363Tで検出された。北側でSK4を切る。断面形は皿形である。確認面での幅2.43m、掘り込み面からの深さ0.23mを測る。埋土は包含層(Ⅱ層)に類似する黒色シルトの単層であり、暗オリーブ色シルトブロックを斑状に少量含み、 $\phi 5 \sim 8\text{mm}$ の炭化物を少量含む。土師器小甕や長甕、軽石製石製品が出土している(図版6)。Ⅱ層上面から掘り込まれ、SK4を切ること、また、埋土も異なることから、土坑の主体時期よりやや新しい時期の所産と推察される。

#### c 小 土 坑 (Pit)

調査区の北側で小土坑(Pit)3基が検出されている。調査区範囲内では建物としての配列は確認できなかった。

#### Pit5 (図版5)

11F-3H21に位置する。平面形は円形で、断面形は箱形である。確認面で長軸0.34m・短軸0.30m・深さ0.38mを測る。埋土は灰色シルトの単層で、遺物は出土していない。

#### Pit6 (図版5)

11F-3H21に位置する。平面形は円形で、断面形は台形状である。確認面で長軸0.27m・短軸0.25m・深さ0.25mを測る。埋土は灰色シルトの単層で、遺物は出土していない。

#### Pit7 (図版5)

11F-3H21に位置する。平面形は円形で、断面形は台形状である。確認面で長軸0.25m・短軸0.25m・深さ0.35mを測る。埋土は灰色シルトの単層で、遺物は出土していない。

いずれもⅢ層上面が確認面となるが、埋土の類似性からSD1と同時期の所産と考えられる。

#### d 地 震 痕 跡

11F-4H1西壁面(基本層序A)及び11F-5H1北壁面(基本層序B)において3条の噴砂脈を確認した。いずれもⅢ層内に収まり、平面的な噴出は確認できず、時期は不明である。青色砂で構成され、供給源は試掘・確認調査で検出されたVe層と推定される。



# 第V章 遺 物

## 第1節 概 要

島灘遺跡からは古代（奈良・平安時代）の遺物が出土している。遺物出土総量は、コンテナ（内法 54.5×33.6×10.0cm）に1箱である。遺物の内容は、石製品1点・土製品1点以外は全て土器である。

調査区内は包含層（Ⅱ層）が部分的にしか残存せず、遺物の大部分が遺構内から出土している。土器は古代の土師器が大半を占め、須恵器は1点のみである。古代土器の編年的位置づけや時代区分については春日真実氏による編年〔春日 1999・2000・2005〕を基本とした。春日編年Ⅲ期（8世紀前半）が主体と考えているが、細片が多く明確な判断が下せないものも多かった。

出土遺物の記述については、土器・土製品・石製品の順とし、さらに遺構内出土種別順（土坑SK・溝SD）、遺構外の順で行う。また、土器の成形・調整技法の表現・名称は、山三賀Ⅱ遺跡〔坂井ほか 1989〕の所見を参考に下記のとおりとした。

「ロクロナデ」－ロクロ・回転台使用、「ナデ」－ロクロ・回転台未使用。

「ロクロケズリ」－ロクロ・回転台使用、「ケズリ」－ロクロ・回転台未使用。

「カキメ」－ロクロ・回転台使用、「ハケメ」－ロクロ・回転台未使用。

「ロクロミガキ」－ロクロ・回転台使用、「ミガキ」－ロクロ・回転台未使用。

「タタキメ」－外面、「当て具痕」－内面。

底部切り離し技法の「ヘラ切り」「糸切り」はロクロの回転を利用したものである。「回転ヘラ切り」と称すべきであるが、「回転」は省略した。

## 第2節 遺構出土遺物（図版 6、別表 2・4）

### SK4（図版 6、写真図版 7）

土師器無台杯(1)、須恵器無台杯(2)、土師器高杯(3)、小甕(4・5)を図示した。1は土師器無台杯の細片である。外面にハケメが施された後、内外面にナデが行われており、内面の一部にススが付着している。2はロクロ成形の須恵器無台杯で、外面に重ね焼き痕が見られる。底部は厚く、切り離しはヘラ切りと推察される。春日編年Ⅲ期の所産であると考え。3は短脚の土師器高杯である。口径に比べ器高が低く、脚部は短い。杯部は内湾してゆるやかに立ち上がるが、口縁部は小さく外反している。外面にハケメが施された後に、内外面ともにナデが行われている。脚部は外面に入念なヘラケズリが施された後に、ナデが行われている。内面にススの付着やミガキの痕跡は認められないが、脚部の内外面に部分的にススが付着している。時期は周辺地域の出土例との法量・器形についての比較から春日編年Ⅲ期の所産であると考えている。4は土師器の小甕で、内外面ともにハケメが施された後にナデが行われている。口縁部は緩やかに外反している。5は口縁端部を面取りし、ハケメ調整を特徴とする西古志型の小甕で、内外面にハケメが施された後、内外面にナデが行われている。内外面にススが付着している。

### SK8（図版 6、写真図版 7）

土師器小甕(6)を図示した。6は土師器の小甕の細片である。内外面ともにハケメが施された後にナデが行われている。外面は赤彩が施され、内面にはススが付着している。口縁部は緩やかに直立して立ち上がっている。

**SK9** (図版 6、写真図版 7)

土師器長甕 (7) を図示した。7 は土師器長甕の底部である。外面は底部にかけてハケメが施された後に、ヘラミガキされ、部分的にススが付着している。内面の底部との境あたりにヘラ押し痕が多数認められる。底部は緩やかにつぼみ、平底で中央部分がやや窪んでおり、砂粒が多数付着している。

**SD1** (図版 6、写真図版 7)

土師器高杯 (8)、長甕 (9) を図示した。8 は土師器高杯の脚部の破片である。外面は赤彩が施されている。9 は土師器長甕で外面はヘラケズリが施された後に、ナデが行われている。図示しなかったが、SD1 の底面付近で、土師器の小片が少量出土している。また、SD1 の上層には近代陶磁器の混入が見られた。

**SD2** (図版 6、写真図版 7)

土師器小甕 (10・11)、石製品 (15) を図示した。10 は土師器の小甕である。内外面ともハケメが施された後に、ナデが行われている。口縁部は緩やかに外反する。11 は小甕の底部である。外面はヘラケズリが施されている。15 は軽石製石製品である。

### 第 3 節 遺構外出土遺物 (図版 6、別表 2・3)

**I d 層** (図版 6、写真図版 7)

土製品 (16) を図示した。16 はカマドの支脚の破片で 11F-5H1 グリッド I d 層から出土した。残存率は 1/3 以下である。

**Ⅲ層** (図版 6、写真図版 7)

土師器無台杯 (13・14)、小甕 (12) を図示した。13 は土師器の無台杯で 11F-4H11 グリッドから出土した。外面にヘラケズリが施され、内面にハケメが施されたのちにナデが行われる。内面にススが付着している。14 は土師器の無台杯で 11F-5H1 グリッドから出土した。内外面にミガキが施された後に、ナデが行われている。12 は土師器の小甕で 11F-4H6 グリッドから出土した。外面にハケメとヘラケズリが施され、内面にハケメが施されたのちにナデが行われている。内面にススが付着している。

## 第VI章 自然科学分析

### 第1節 島灘瀨遺跡の土層

日本列島の平野の中で、沖積平野の割合がとくに高い越後平野に位置する新潟市島灘瀨遺跡において、植物珪酸体分析と花粉分析を実施して、過去の土地利用や周辺の植生の復元を実施した。微化石分析に先立って、現地で土層断面観察を実施して、微化石分析に供する試料を高純度で採取した。調査分析の対象は、第1地点(11F-4H1 杭南0.4m地点)、第2地点(SK10)、第3地点(SD2)、第4地点(SK4)の4地点である。

#### 1) 第1地点(11F-4H1 杭南0.4m地点)

第1地点(11F-4H1 杭南0.4m地点)では、下位より灰色砂質シルト層(層厚5cm以上)、暗灰色泥ブロック混じり灰色泥層(層厚14cm)、暗灰色腐植質泥層(層厚8cm, II層)、やや暗い灰色泥層(層厚6cm)、灰色泥層(層厚14cm)、やや黄色がかった灰色シルト層(層厚16cm)、褐色土(層厚8cm)が認められる(第6図①)。このうち、II層は平安時代の、またII層より上位の土層は人為による堆積物と考えられている。

#### 2) 第2地点(SK10)

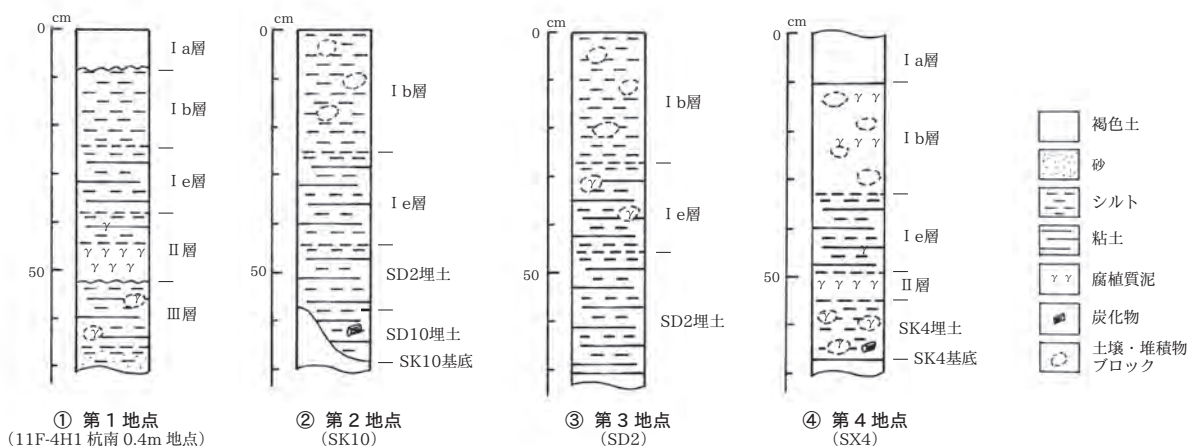
奈良時代の遺構と推定されているSK10の埋土は、土器片や炭化物を含む青灰色泥層(層厚10cm)からなる。その上位には、下位より、やや暗い青灰色泥層(層厚14cm)、青灰色泥層(層厚19cm)、褐色土ブロック混じりでやや黄色がかった灰色シルト層(層厚25cm)が認められる(第6図②)。これらのうち、やや暗い青灰色泥層は、奈良・平安時代と考えられているSD2の埋土に相当する。

#### 3) 第3地点(SD2)

第3地点では、下位よりやや青色がかった暗灰色泥層(層厚25cm)、灰褐色泥ブロック混じり青灰色泥層(層厚18cm)、褐色土ブロック混じりでやや黄色がかった灰色シルト層(層厚27cm)が認められる(第6図③)。これらのうち、最下位のやや青色がかった暗灰色泥層は、奈良・平安時代と考えられているSD2の埋土に相当する。

#### 4) 第4地点(SK4)

奈良時代の可能性が考えられているSK4では、下位より炭化物混じりで暗灰褐色土や、やや黄色がかった灰色シルトのブロックからなる土層(層厚12cm以上)、暗灰褐色泥層(層厚6cm)、やや暗い灰色泥層(層厚16cm)、褐色土ブロック混じり暗灰色泥層(層厚23cm)、I a層(層厚24cm以上)が認められる(第6図④)。



第6図 島灘瀨遺跡の土層柱状図

## 第2節 島瀬灘遺跡における植物珪酸体(プラント・オパール)分析

### はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸( $\text{SiO}_2$ )が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石(プラント・オパール)となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法で、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている〔杉山2000〕。

### A 試料

植物珪酸体分析の対象試料は、第1地点(基本土層)のII層(奈良・平安時代)と基盤層(奈良時代)、第2地点のSK10埋土(奈良時代)、第3地点のSD2埋土(奈良・平安時代)、第4地点のSK4埋土(奈良時代)から採取された計5点である。試料採取層位を分析結果の柱状図(第7図)に示す。

### B 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法〔藤原1976〕を用いて次の手順で行った。

- 1) 試料を105°Cで24時間乾燥(絶乾)。
- 2) 試料約1gに対し直径約40 $\mu\text{m}$ のガラスビーズを約0.02g添加(0.1mgの精度で秤量)。
- 3) 電気炉灰化法(550°C・6時間)による脱有機物処理。
- 4) 超音波水中照射(300W・42KHz・10分間)による分散。
- 5) 沈底法による20 $\mu\text{m}$ 以下の微粒子除去。
- 6) 封入剤(オイキット)中に分散してプレパラート作成。
- 7) 検鏡・計数。

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重(1.0と仮定)と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重)をかけて、単位面積で厚層1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる〔杉山2000〕。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

### C 分析結果

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を第2表および第7図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。なお、イネ科栽培植物(イネ、ムギ類、ヒエ、アワ、キビなど)に由来する植物珪酸体は、いずれの試料からも検出されなかった。

〔イネ科〕

イネ、ヨシ属、キビ族型、ウシクサ族A(チガヤ属など)

〔イネ科-タケ亜科〕

チマキザサ節型(ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など)、ミヤコザサ節型(ササ属ミヤコザサ節など)、未分類等

〔イネ科-その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

〔樹木〕

その他

## D 考 察

### 1) イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネをはじめムギ類、ヒエ属型（ヒエが含まれる）、エノコログサ属型（アワが含まれる）、キビ属型（キビが含まれる）、ジユズダマ属型（ハトムギが含まれる）、オヒシバ属（シコクビエが含まれる）、モロコシ属型などがある。このうち、本遺跡の試料からはイネが検出された。

イネは、第1地点（基本土層）のII層（試料1）、第2地点のSK10埋土（試料1）、第3地点のSD2埋土（試料1）、第4地点のSK4埋土（試料1）から検出された。イネの密度は、第1地点（試料1）では2,200個/g、その他の試料では700～800個/gと比較的低い値であり、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている5,000個/g（状況により3,000個/gとする場合もある）を下回っている。以上のことから、第1地点（基本土層）のII層および各遺構埋土の堆積当時は、調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていたと考えられ、そこから何らかの形で遺構内にイネの植物珪酸体が混入したと推定される。

イネ科栽培植物の中には検討が不十分なものもあるため、その他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。なお、植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため、根菜類などの畑作物は分析の対象外となっている。

### 2) 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

上記以外の分類群の検出状況と、そこから推定される植生・環境について検討を行った。第1地点のII層（試料1）では、ヨシ属、キビ族型、ウシクサ族A、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型、樹木（その他）などが検出されたが、いずれも少量である。その下層

（試料2）では、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型などが検出されたが、いずれも少量である。その他の地点については、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型などが検出されたが、いずれも少量である。その他の地点については、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型などが検出され、第3地点のSD2埋土（試料1）ではヨシ属も検出されたが、いずれも少量である。おもな分類群の推定生産量によると、第3地点のSD2埋土（試料1）ではヨシ属が優勢となっている。

以上の結果から、第1地点（基本土層）のII層（平安時代）および第3地点のSD2埋土（奈良・平安時代）の堆積当時は、ヨシ属が生育するような湿潤な環境であったと考えられ、そこを利用して調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていたと推定される。また、周辺の比較的乾燥したところにはササ属（おもに

第2表 島瀬遺跡における植物珪酸体分析結果

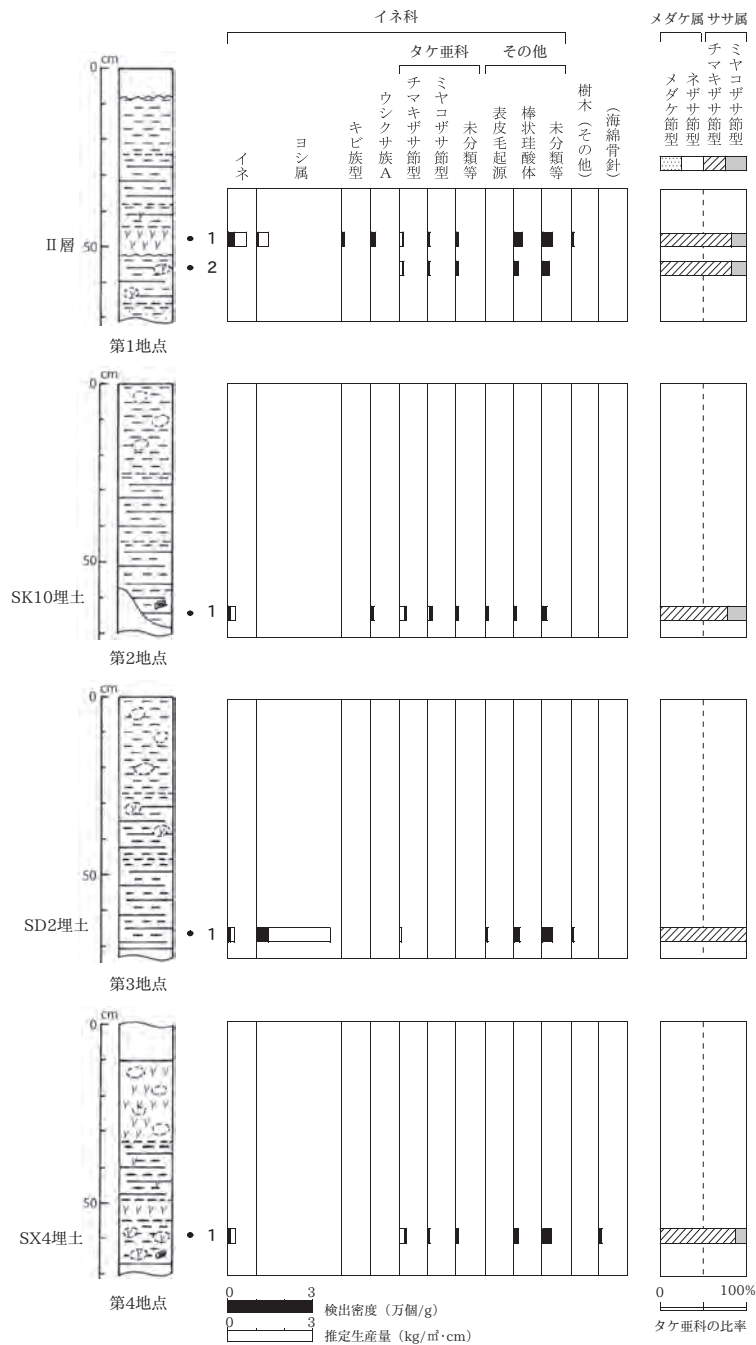
分類群	学名	検出密度（単位：×100個/g）				
		地点・試料		第1地点	第2	第3
		1	2	1	1	1
イネ科	Gramineae					
イネ	<i>Oryza sativa</i>	22		8	7	8
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	7			42	
キビ族型	Panicaceae type	7				
ウシクサ族A	Andropogoneae A type	14		8		
タケ亜科	Bambusoideae					
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	14	15	23	7	23
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	7	8	15		8
未分類等	Others	7	8	8		8
その他のイネ科	Others					
表皮毛起源	Husk hair origin			8	7	
棒状珪酸体	Rod-shaped	29	15	8	21	15
未分類等	Others	36	23	15	35	30
樹木起源	Arboreal					
その他	Others	7			7	
（海綿骨針）	Sponge spicules					8
植物珪酸体総数	Total	151	68	90	126	90
おもな分類群の推定生産量（単位：kg/m <sup>2</sup> ・cm）：試料の仮比重を1.0と仮定して算出						
イネ	<i>Oryza sativa</i>	0.63		0.22	0.21	0.22
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	0.45			2.66	
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	0.11	0.11	0.17	0.05	0.17
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	0.02	0.02	0.05		0.02
タケ亜科の比率（%）						
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	83	83	79	100	88
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	17	17	21		12
メダケ率	Medake ratio	0	0	0	0	0

チマキザサ節)などの笹類が生育し、遺跡周辺には何らかの樹木が分布していたと推定される。その他の地点の遺構埋土(奈良時代)については、ササ属(おもにチマキザサ節)などの笹類は見られるものの、ヨシ属が検出されないことから、堆積環境が相対的に乾燥していた可能性も考えられる。

### E ま と め

植物珪酸体分析の結果、第1地点(基本土層)のII層(平安時代)および各遺構(奈良・平安時代)の埋土の堆積当時は、調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていたと考えられ、そこから何らかの形で遺構内にイネの植物珪酸体が混入したと推定される。

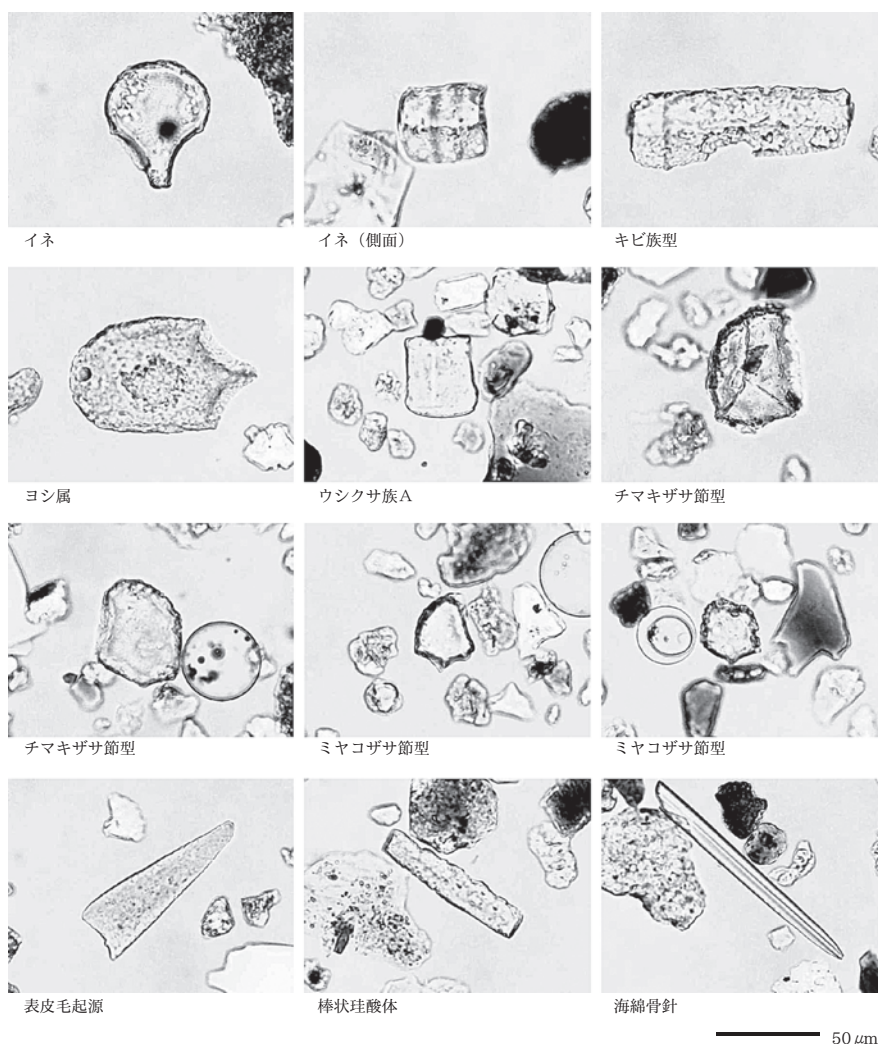
第1地点のII層(平安時代)および第3地点のSD2埋土(奈良・平安時代)の堆積当時は、ヨシ属が生育する



第7図 島瀬遺跡における植物珪酸体組成ダイアグラム



ような湿潤な環境であったと考えられ、周辺の比較的乾燥したところにはササ属（おもにチマキザサ節）などの笹類が生育していたと推定される。その他の地点の遺構埋土（奈良・平安時代）については、ヨシ属が検出されないことから、堆積環境が相対的に乾燥していた可能性も考えられる。



第8図 島瀬瀨遺跡における植物珪酸体（プラント・オパール）の顕微鏡写真

### 文献

- 杉山真二・藤原宏志（1986）機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定－古環境推定の基礎資料として－. 考古学と自然科学, no.19, p.69-84.
- 杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）. 辻 誠一郎編「考古学と植物学」. 同成社, p.189-213.
- 藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）－数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法－. 考古学と自然科学, no.9, p.15-29.
- 藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）－プラント・オパール分析による水田址の探査－. 考古学と自然科学, no.17, p.73-85.

## 第3節 島灘瀨遺跡における花粉分析

### はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの有機質遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

### A 試料

花粉分析の対象試料は、第1地点(基本土層)のII層(平安時代)と基盤層(奈良時代)、第2地点のSK10埋土(奈良時代)、第3地点のSD2埋土(奈良・平安時代)、第4地点のSK4埋土(奈良時代)から採取された計5点である。試料採取層位を分析結果の柱状図(第9図)に示す。

### B 方法

花粉の分離抽出は、中村〔1967〕の方法をもとに次の手順で行った。

- 1) 試料から1cm<sup>3</sup>を秤量。
- 2) 0.5%リン酸三ナトリウム(12水)溶液を加えて15分間湯煎。
- 3) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除いて、沈澱法で砂粒を除去。
- 4) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置。
- 5) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理(無水酢酸9:濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎)を施す。
- 6) 再び氷酢酸を加えて水洗処理。
- 7) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成。
- 8) 検鏡・計数。

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉〔1973〕および中村〔1980〕をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン(―)で結んで示した。イネ属については、中村〔1974, 1977〕を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とした。

### C 結果

#### 1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉25、樹木花粉と草本花粉を含むもの4、草本花粉20、シダ植物孢子2形態の計51である。また、寄生虫卵1分類群が認められた。分析結果を第3表に示し、花粉数が100個以上計数された試料については花粉総数を基数とする花粉ダイアグラム(第9図)を示した。主要な分類群について顕微鏡写真(第10図)を示す。次に分析で出現した分類群を記載する。

#### 〔樹木花粉〕

モミ属、トウヒ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、マツ属単維管束亜属、スギ、イチイ科―イヌガヤ科―ヒノキ科、ヤナギ属、サワグルミ、ノグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、クマシデ属―アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属―ケヤキ、エノキ属―ムクノキ、モチノキ属、トチノキ、ブドウ属、シナノキ属、トネリコ属



〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科-イラクサ科、マメ科、ウコギ科、ニワトコ属-ガマズミ属

〔草本花粉〕

サジオモダカ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ミズバショウ属、ミズアオイ属、タデ属  
 サナエタデ節、ギシギシ属、ソバ属、アカザ科-ヒユ科、ナデシコ科、アブラナ科、ツリフネソウ属、アカバナ  
 科、チドメグサ亜科、セリ亜科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物孢子〕

単条溝孢子、三条溝孢子

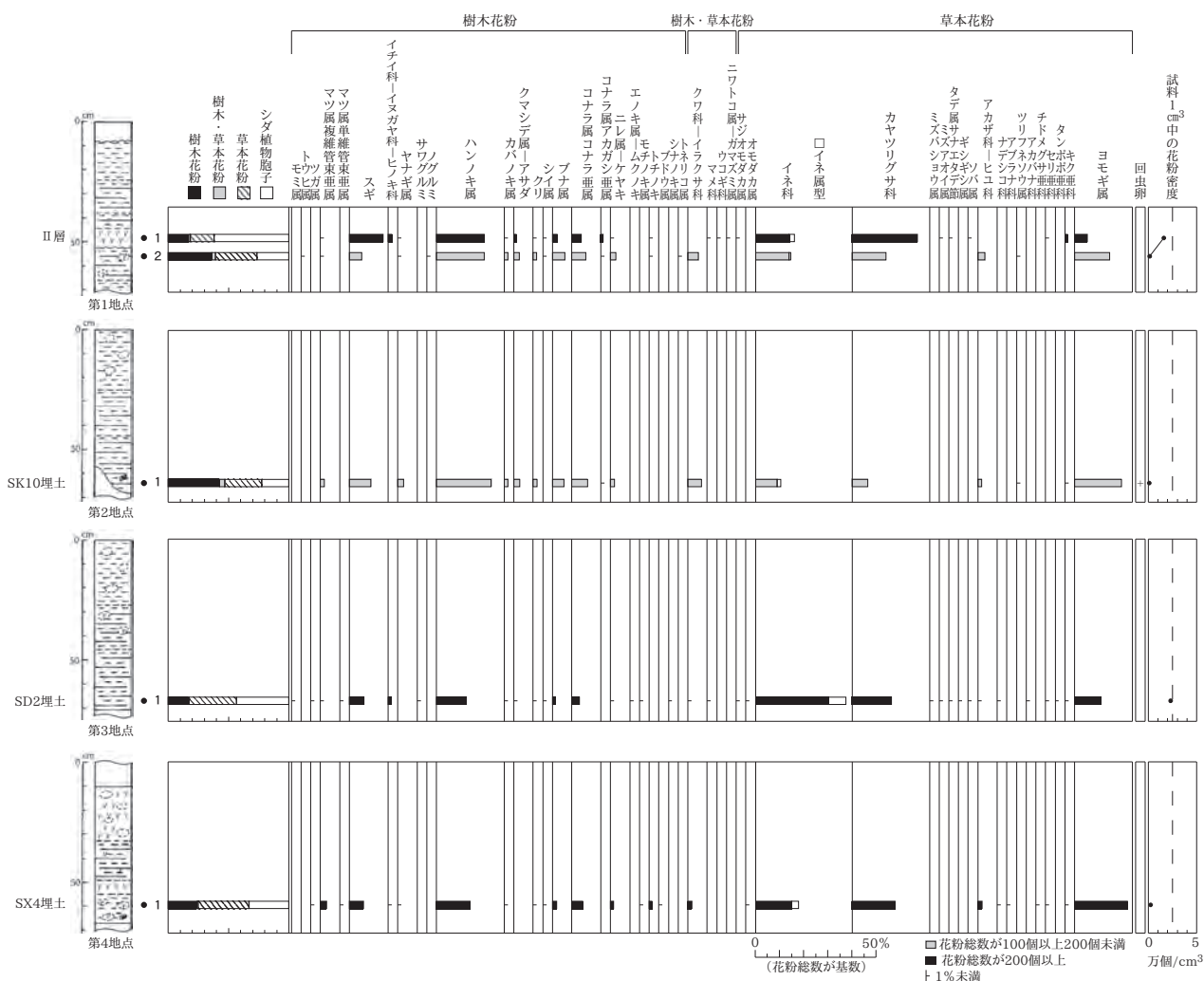
〔寄生虫卵〕

回虫卵

2) 花粉群集の特徴

1) 第1地点

基盤層（試料2）では、花粉密度が低く、樹木花粉の占める割合が36%、草本花粉が35%、シダ植物孢子が27%である。樹木花粉では、ハンノキ属が優勢で、コナラ属コナラ亜属、ブナ属、スギなどが伴われる。草本花粉では、イネ科（イネ属型を含む）、カヤツリグサ科、ヨモギ属が優勢で、アカザ科-ヒユ科などが伴われる。



第9図 島灘瀨遺跡における花粉ダイアグラム

第3表 島灘遺跡における花粉分析結果

学名	分類群	和名	第1地点		第2地点	第3地点	第4地点
			1	2	1	1	1
Arboreal pollen		樹木花粉					
<i>Abies</i>		モミ属				1	
<i>Picea</i>		トウヒ属		1			
<i>Tsuga</i>		ツガ属				1	1
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>		マツ属複雑管束亜属	2	1	2	1	6
<i>Pinus</i> subgen. <i>Haploxylon</i>		マツ属単管束亜属				3	1
<i>Cryptomeria japonica</i>		スギ	43	7	11	21	14
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae		イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	5			5	2
<i>Salix</i>		ヤナギ属	2	1	3		1
<i>Pterocarya rhoifolia</i>		サワグルミ				1	
<i>Platycarya strobilacea</i>		ノグルミ		1			
<i>Alnus</i>		ハンノキ属	61	27	28	43	34
<i>Betula</i>		カバノキ属	2	2	2	1	2
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>		クマシデ属-アサダ	3	3	3	3	
<i>Castanea crenata</i>		クリ	1	2	2	1	1
<i>Castanopsis</i>		シイ属	2	1		1	1
<i>Fagus</i>		ブナ属	6	7	6	4	4
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>		コナラ属コナラ亜属	12	8	8	11	11
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>		コナラ属アカガシ亜属	3	1	1		
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>		ニレ属-ケヤキ	2	3	2	2	3
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>		エノキ属-ムクノキ				1	
<i>Ilex</i>		モチノキ属				1	1
<i>Aesculus turbinata</i>		トチノキ	1	1			3
<i>Vitis</i>		ブドウ属					1
<i>Tilia</i>		シナノキ属				2	
<i>Fraxinus</i>		トネリコ属		1			
Arboreal · Nonarboreal pollen		樹木 · 草本花粉					
Moraceae-Urticaceae		クワ科-イラクサ科		6	7	2	4
Leguminosae		マメ科	2			3	
Araliaceae		ウコギ科	1				
<i>Sambucus-Viburnum</i>		ニワトコ属-ガマズミ属	2				
Nonarboreal pollen		草本花粉					
<i>Alisma</i>		サジオモダカ属	1			3	
<i>Sagittaria</i>		オモダカ属				1	1
Gramineae		イネ科	43	19	11	106	36
<i>Oryza type</i>		イネ属型	7	1	2	25	7
Cyperaceae		カヤツリグサ科	83	19	8	57	43
<i>Lysichiton</i>		ミズバショウ属				1	
<i>Monochoria</i>		ミズアオイ属	2			1	
<i>Polygonum sect. Persicaria</i>		タデ属サナエタデ節	1			1	
<i>Rumex</i>		ギンギン属				1	
<i>Fagopyrum</i>		ソバ属	1			1	
Chenopodiaceae-Amaranthaceae		アカザ科-ヒユ科		4	2	1	4
Caryophyllaceae		ナデシコ科				2	1
Cruciferae		アブラナ科					2
<i>Impatiens</i>		ツリフネソウ属		1	1		
Onagraceae		アカバナ科				1	
Hydrocotyloideae		チドメグサ亜科					2
Apiodeae		セリ亜科	2			1	2
Lactuodeae		タンポポ亜科				1	
Asterodeae		キク亜科	3		1	1	1
<i>Artemisia</i>		ヨモギ属	16	20	24	38	53
Fern spore		シダ植物胞子					
Monolate type spore		単条溝胞子	501	46	33	269	115
Trilate type spore		三条溝胞子		3	3	1	5
Arboreal pollen		樹木花粉	145	67	68	103	86
Arboreal · Nonarboreal pollen		樹木 · 草本花粉	5	6	7	5	4
Nonarboreal pollen		草本花粉	159	64	49	242	152
Total pollen		花粉総数	309	137	124	350	242
Pollen frequencies of 1cm <sup>3</sup>		試料1cm <sup>3</sup> 中の花粉密度	1.6 × 10 <sup>4</sup>	1.4 × 10 <sup>3</sup>	1.0 × 10 <sup>3</sup>	2.3 × 10 <sup>4</sup>	2.3 × 10 <sup>3</sup>
Unknown pollen		未同定花粉	6	7	6	6	10
Fern spore		シダ植物胞子	501	49	36	270	120
Helminth eggs		寄生虫卵					
<i>Ascaris (lumbricoides)</i>		回虫卵			1		
Total		計			1		
Helminth eggs frequencies of 1cm <sup>3</sup>		試料1cm <sup>3</sup> 中の寄生虫卵密度			0.8 × 10		
Stone cell		石細胞	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Digestion rimeins		明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Charcoal · woods fragments		微細炭化物 · 微細木片	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)
微細植物遺体 (Charcoal · woods fragments)		(×10 <sup>5</sup> )					
未分解遺体片			2.8		0.8	7.8	
分解質遺体片			2.8			5.2	6.6
炭化遺体片 (微炭)			0.5			0.8	1.5

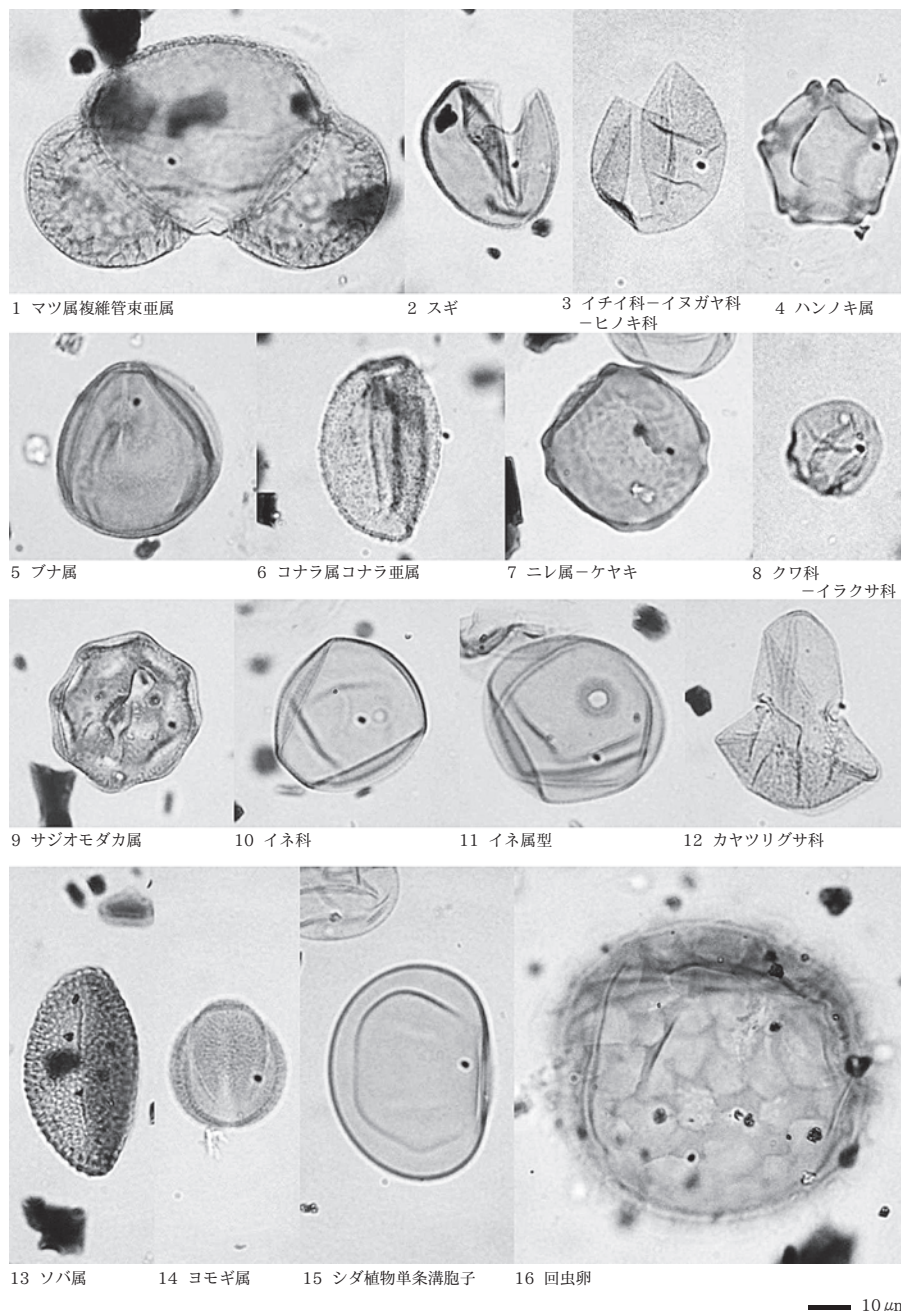
II層（試料1）では、シダ植物胞子の占める割合が増加し、樹木花粉ではスギが増加している。草本花粉では、カヤツリグサ科が増加し、ヨモギ属は減少している。また、ソバ属が出現している。

2) 第2地点

SK10埋土（試料1）では、花粉密度が低く、樹木花粉の占める割合が43%、草本花粉が31%、シダ植物胞子が23%である。樹木花粉では、ハンノキ属が優勢で、スギ、コナラ属コナラ亜属、ブナ属などが伴われる。草本花粉では、ヨモギ属、イネ科（イネ属型を含む）が優勢で、カヤツリグサ科、アカザ科-ヒユ科などが伴われる。また、少量ながら回虫卵が検出された。

3) 第3地点

SD2埋土（試料1）では、樹木花粉の占める割合が17%、草本花粉が39%、シダ植物胞子が44%である。樹木花粉では、ハンノキ属が優勢で、スギ、コナラ属コナラ亜属などが伴われる。草本花粉では、イネ科（イネ属



第10図 島灘瀨遺跡における花粉・胞子・寄生虫卵

型を含む)、カヤツリグサ科、ヨモギ属が優勢で、ソバ属、サジオモダカ属、オモダカ属、ミズアオイ属、ミズバショウ属などが伴われる。

#### 4) 第4地点

SK4埋土(試料1)では、樹木花粉の占める割合が24%、草本花粉が42%、シダ植物胞子が33%である。樹木花粉では、ハンノキ属が優勢で、スギ、コナラ属コナラ亜属、マツ属複雑管束亜属などが伴われる。草本花粉では、ヨモギ属、カヤツリグサ科、イネ科(イネ属型を含む)が優勢で、オモダカ属、アカザ科-ヒユ科などが伴われる。

### D 花粉分析から推定される植生と環境

第1地点(基本土層)の基盤層(奈良時代)では、少量ながらイネ属型が認められることから、周辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。同層の堆積当時は、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属、アカザ科-ヒユ科などの草本が生育する日当たりの良い比較的乾燥した環境であったと考えられる。また、遺跡周辺にはハンノキ属の湿地林が分布し、周辺地域にはコナラ属コナラ亜属、ブナ属などの落葉広葉樹林およびスギ林が分布していたと推定される。第2地点のSK10埋土(奈良時代)、第4地点のSK4埋土(奈良時代)についても、おおむね同様の状況であったと考えられる。

II層(平安時代)では、イネ科(イネ属型を含む)、カヤツリグサ科が増加して、水田雑草の性格をもつ水生植物のオモダカ属、ミズアオイ属も認められることから、調査地点もしくはその近辺で水田稲作が行われていたと推定される。また、少量ながらソバ属が検出されることから、ソバなどの畑作の可能性も示唆される。森林植生としては、周辺地域でスギ林が増加した可能性が考えられる。第3地点のSD2埋土(奈良・平安時代)についても、おおむね同様の状況であったと考えられる。

第2地点のSK10埋土(奈良時代)では寄生虫卵(回虫卵)が検出されたが、低密度であることから、集落周辺などの人為環境における生活汚染に由来すると考えられる。回虫はヒト特有の寄生虫で、中間宿主を必要とせず、糞便とともに排泄された寄生虫卵が付着した野菜・野草の摂取や水系により経口感染する。

### 文 献

- 金原正明(1993)花粉分析法による古環境復原. 木下正史編「新版古代の日本 第10巻 古代資料研究の方法」, 角川書店, p.248-262.
- 金原正明(1999)寄生虫, 西本豊弘・松井 章編「考古学と動物学」, 同成社, p.151-158.
- 金原正明(2004)寄生虫卵分析. 安田喜憲編「環境考古学ハンドブック」, 朝倉書店, p.419-429.
- 島倉巳三郎(1973)日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録, 第5集, 60p.
- 中村 純(1967)「花粉分析」, 古今書院, p.82-110.
- 中村 純(1974)イネ科花粉について、とくにイネ(*Oryza sativa*)を中心として. 第四紀研究, 13, p.187-193.
- 中村 純(1977)稲作とイネ花粉. 考古学と自然科学, no.10, p.21-30.
- 中村 純(1980)日本産花粉の標徴. 大阪自然史博物館収蔵目録, 第13集, 91p.

## 第4節 島灘瀨遺跡出土試料のAMS法による放射性炭素年代測定

### A 測定対象試料

島灘瀨遺跡は、新潟県新潟市西蒲区巻東町小寺瀨地先に所在し、沖積地の自然堤防上に立地する。測定対象試料は、遺構から出土した炭化物2点である(第4表)。

## B 測定 の 意 義

遺構の埋没年代を推定する。

## C 化学 処 理 工 程

- 1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- 2) 酸-アルカリ-酸 (AAA: Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常  $1\text{mol}/\ell$  (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と表 1 に記載する。
- 3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 ( $\text{CO}_2$ ) を発生させる。
- 4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- 5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- 6) グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

## D 測 定 方 法

加速器をベースとした  $^{14}\text{C}$ -AMS 専用装置 (NEC 社製) を使用し、 $^{14}\text{C}$  の計数、 $^{13}\text{C}$  濃度 ( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ )、 $^{14}\text{C}$  濃度 ( $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ ) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシユウ酸 ( $\text{HOx II}$ ) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

## E 算 出 方 法

- 1)  $\delta^{13}\text{C}$  は、試料炭素の  $^{13}\text{C}$  濃度 ( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ ) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (%) で表した値である (第 4 表)。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- 2)  $^{14}\text{C}$  年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中  $^{14}\text{C}$  濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期 (5568 年) を使用する [Stuiver and Polach 1977]。  $^{14}\text{C}$  年代は  $\delta^{13}\text{C}$  によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を第 4 表に、補正していない値を参考値として第 5 表に示した。  $^{14}\text{C}$  年代と誤差は、下 1 桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、 $^{14}\text{C}$  年代の誤差 ( $\pm 1\sigma$ ) は、試料の  $^{14}\text{C}$  年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2% であることを意味する。
- 3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の  $^{14}\text{C}$  濃度の割合である。pMC が小さい ( $^{14}\text{C}$  が少ない) ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上 ( $^{14}\text{C}$  の量が標準現代炭素と同等以上) の場合 Modern とする。この値も  $\delta^{13}\text{C}$  によって補正する必要があるため、補正した値を第 4 表に、補正していない値を参考値として第 5 表に示した。
- 4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の  $^{14}\text{C}$  濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の  $^{14}\text{C}$  濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 $^{14}\text{C}$  年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1 標準偏差 ( $1\sigma=68.2\%$ ) あるいは 2 標準偏差 ( $2\sigma=95.4\%$ ) で表示される。グラフの縦軸が  $^{14}\text{C}$  年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$  補正を行い、下 1 桁を丸めない  $^{14}\text{C}$  年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal 13 データベース [Reimer et al. 2013] を用い、OxCalv4.2 較正プログラム [Bronk Ramsey 2009] を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、



プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として第5表に示した。暦年較正年代は、<sup>14</sup>C年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP)」という単位で表される。

## F 測定結果

測定結果を第4表、第5表に示す。

試料の<sup>14</sup>C年代は、SK4 遺構埋土試料が1260±30yrBP、SK8 遺構埋土試料が1230±20yrBPである。暦年較正年代(1σ)は、SK4 遺構埋土試料が690～769cal AD、SK8 遺構埋土試料が695～862cal ADの間に各々複数の範囲で示される。

試料の炭素含有率はいずれも60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

第4表 放射性炭素年代測定結果 (δ<sup>13</sup>C 補正值)

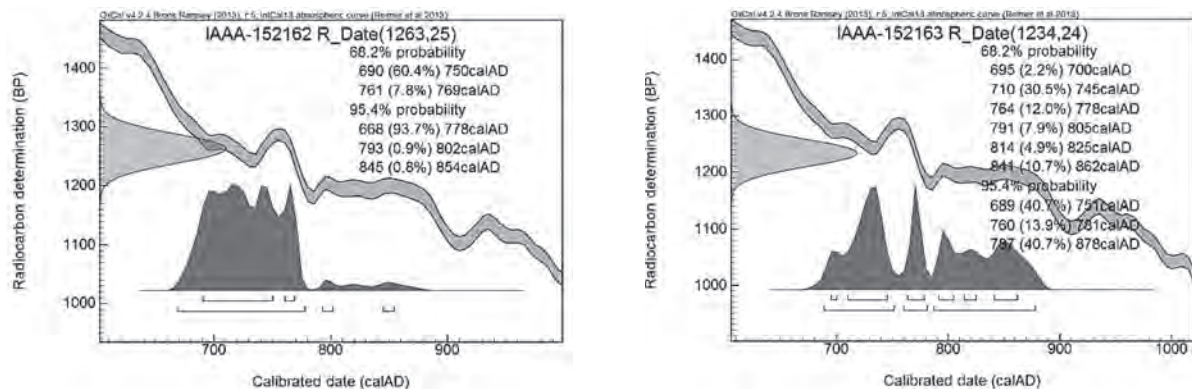
測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ <sup>13</sup> C (‰) (AMS)	δ <sup>13</sup> C補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-152162	SK4遺構埋土	SK4 1層	炭化物	AAA	-26.19±0.43	1,260±30	85.45 ±0.27
IAAA-152163	SK8遺構埋土	SK8 1層	炭化物	AAA	-27.92±0.56	1,230±20	85.75 ±0.26

[#7693]

第5表 放射性炭素年代測定結果 (δ<sup>13</sup>C 未補正值、暦年較正用<sup>14</sup>C年代、較正年代)

測定番号	δ <sup>13</sup> C補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-152162	1,280±20	85.24±0.26	1,263±25	690calAD-750calAD (60.4%) 761calAD-769calAD ( 7.8%)	668calAD-778calAD (93.7%) 793calAD-802calAD ( 0.9%) 845calAD-854calAD ( 0.8%)
IAAA-152163	1,280±20	85.24±0.24	1,234±24	695calAD-700calAD ( 2.2%) 710calAD-745calAD (30.5%) 764calAD-778calAD (12.0%) 791calAD-805calAD ( 7.9%) 814calAD-825calAD ( 4.9%) 841calAD-862calAD (10.7%)	689calAD-751calAD (40.7%) 760calAD-781calAD (13.9%) 787calAD-878calAD (40.7%)

[参考値]



第11図 島瀬瀬遺跡の暦年較正年代グラフ (参考)

## 文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51 (1), 337-360
- Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55 (4), 1869-1887
- Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of <sup>14</sup>C data, *Radiocarbon* 19 (3), 355-363

## 第Ⅶ章 総 括

### 第 1 節 島灘瀬遺跡の出土土器について

#### A 出土土器の編年的位置づけ

島灘瀬遺跡第 5 次調査では、出土遺物の大半が調査区中央付近に位置する遺構内から出土しており、遺物包含層（Ⅱ・Ⅲa 層）からの出土は極めて少ない。遺構出土土器についても、一定のまとまりを有するものは SK4 に限定される。また、検出された古代の遺構は土坑 4 基と溝 1 条であり、遺構の切り合いによる前後関係も明瞭でないため、全体としての傾向を述べるにとどめる。

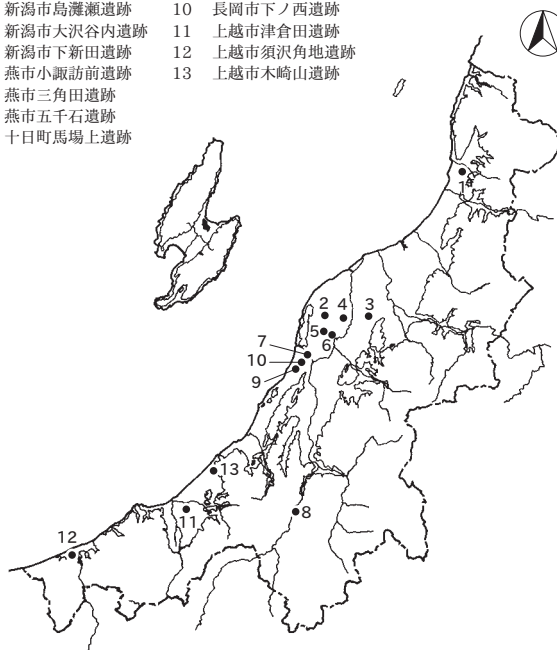
島灘瀬遺跡が所在する西蒲原地域および県内の古代土器編年は、春日真実氏によってまとめられている〔春日 1999・2000・2005 など〕。これをもとに編年的位置づけを行う。今回の調査における出土土器は、土師器が大半を占め、須恵器は SK4 で出土した無台杯（2）1 点のみである。土師器煮炊具は、西古志型とみられる 1 点（5）を含め、すべて非ロクロ成形で平底となる長甕・小甕であり、春日編年Ⅴ期以降に主流を占めるロクロ成形のものは認められない。確認調査においては他地点で佐渡小泊窯産須恵器が確認できるが、今回の調査範囲では、在地（西古志・角田山麓）産とみられる須恵器無台杯（2）1 点にとどまる。後述するように土師器高杯（3）が春日編年Ⅲ期の所産である可能性が高く、同遺構で西古志型甕（5）が出土していることを考慮に入れば、今回の調査で出土した古代土器は春日編年Ⅲ期からⅣ期の範疇に収まると考える。なお、SK4・8 の埋土中で検出された炭化物の放射性炭素年代測定（AMS 法）においても（第Ⅶ章第 4 節参照）、概ね 7 世紀後半～8 世紀代に収まる結果が得られている。

#### B SK4 出土土器について

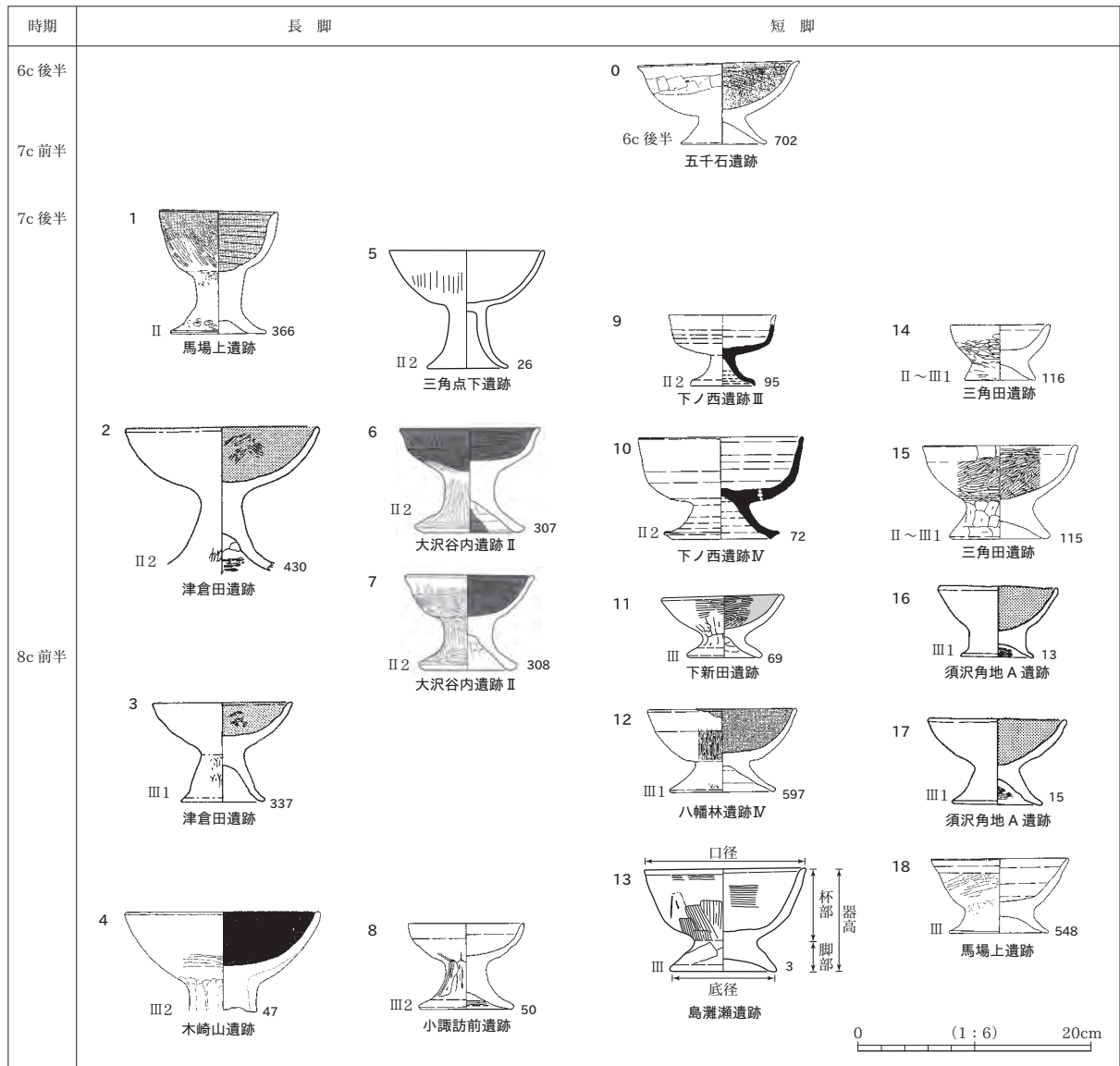
SK4 から出土した土師器高杯（3）と小甕（5）について若干の考察を試みる。

SK4 から出土した高杯は、小型短脚で口縁部がほぼ垂直に立ち上がる形状を持ち、春日真実氏の分類では高杯 C 類とされている器種である〔春日 2006〕。新潟県内において高杯は、弥生・古墳時代から多数出土している器種で、内湾する杯部に外反する口縁部がつく A 類や、模倣杯状の杯部を持つ B 類が 6 世紀の後半頃まで隆盛を極めるが、6 世紀後半頃より口縁部が内湾しながら垂直に立ち上がる C 類が確認できるとされる。C 類の多くは、非ロクロ成形の土師器で、A・B 類同様に内面に黒色処理を行うものが大半で、杯部の外面にハケメ調整が施され、脚部についても入念なヘラケズリが施されていることが多い。C 類は 6 世紀後半から 8 世紀後半まで出土しているが、9 世紀以降のロクロ成形の土師器は出土して

- |             |              |
|-------------|--------------|
| 1 村上市三角点下遺跡 | 9 長岡市八幡林遺跡   |
| 2 新潟市島灘瀬遺跡  | 10 長岡市下ノ西遺跡  |
| 3 新潟市大沢谷内遺跡 | 11 上越市津倉田遺跡  |
| 4 新潟市下新田遺跡  | 12 上越市須沢角地遺跡 |
| 5 燕市小沢訪前遺跡  | 13 上越市木崎山遺跡  |
| 6 燕市三角田遺跡   |              |
| 7 燕市五千石遺跡   |              |
| 8 十日町馬場上遺跡  |              |



第 12 図 高杯 C 類が出土した新潟県内の遺跡



※ 図は各遺跡報告書より転載、トーンはすべて黒色処理

第13図 新潟県内の遺跡から出土した高杯C類

第6表 新潟県内の遺跡から出土した高杯C類観察表

図版No.	旧報告書No.	時期	遺跡名	遺跡所在地	出土位置	種別	法量 (cm)							文献	備考
							口径	底径	口径÷底径	器高	杯部	脚部	器高÷脚部		
0	702	6c後半	五千石遺跡	燕市		黒色土器	13.7	6.9	1.99	7.2	4.8	2.4	3.00	[松島・山下ほか2010]	内黒
1	366	II	馬場上遺跡	十日町	26号住	黒色土器	10.1	8.2	1.23	10.5	5.7	4.8	2.19	[菅沼・阿部2003]	内黒
2	430	II 2	津倉田遺跡	上越市		黒色土器	16.2	(9.1)	(1.78)	(12.3)	(5.4)	6.9	(1.78)	[笹澤・小島1999]	内黒
3	337	III 1	津倉田遺跡	上越市		黒色土器	11.6	6.9	1.68	8.5	4.0	4.5	1.89	[戸根ほか1992]	内黒
4	47	III 2	木崎山遺跡	上越市	3号住居	黒色土器	16.4			(8.4)	6.0	(2.4)	3.50	[上原1962]	内黒
5	26	II 2	三角点下遺跡	村上市		土師器	13.1	6.8	1.93	10.2	5.0	5.2	1.96	[細野・伊比ほか2012]	内黒
6	307	II 2	大沢谷内遺跡	新潟市	SX945	黒色土器	11.8	8	1.48	8.9	3.7	5.2	1.71	[布施ほか2006]	内黒
7	308	II 2	大沢谷内遺跡	新潟市	SX945	黒色土器	10.6	7.3	1.45	8.0	3.5	4.5	1.78	[田中2000]	内黒
8	50	III 2	小諏訪前遺跡	燕市		土師器	9.6	7.6	1.26	7.3	3.4	3.9	1.87	[田中2003]	
9	95	II 2	下ノ西遺跡	長岡市		須恵器	9	5.3	1.70	6.0	3.5	2.5	2.40	[龍田ほか2015]	
10	72	II 2	下ノ西遺跡	長岡市	SK583	須恵器	14	9.9	1.41	8.6	5.6	3.0	2.87	[田中2005]	酸化炎焼成
11	69	III	下新田遺跡	新潟市	SD7	黒色土器	10.2	6.4	1.59	5.3	3.5	1.8	2.94	[本書]	内黒
12	597	III 1	八幡林遺跡	長岡市		黒色土器	12.7	9	1.41	7.1	4.3	2.8	2.54	[松島2001]	内黒
13	3	III	島瀬瀬遺跡	新潟市	SK4	土師器	13.8	9	1.53	8.9	6.1	2.8	3.18	[中村・小池1988]	内黒
14	116	II~III 1	三角田遺跡	燕市		土師器	8.8	5.8	1.52	4.6	3.1	1.5	3.07	[菅沼・阿部2003]	
15	115	II~III 1	三角田遺跡	燕市		土師器	13	8.5	1.53	8.0	4.7	3.3	2.42		
16	13	III 1	須沢角地A遺跡	上越市		黒色土器	10	6	1.67	6.2	3.8	2.4	2.58		内黒
17	15	III 1	須沢角地A遺跡	上越市		黒色土器	11.6	7.2	1.61	7.4	4.4	3.0	2.47		内黒
18	548	III	馬場上遺跡	十日町	2号住	土師器	11.8	8.4	1.40	6.3	4.4	1.9	3.32		



いないのが特徴である。このような形態の高杯C類のなかで、本遺跡出土品は、どのような位置づけになるものであるか考えてみたい。

法量・器形について比較を行うために、新潟県内で出土した高杯C類のうち6世紀後半から8世紀前半にかけてのものを中心に19点を集成した(第13図)。集成にあたっては杯部と脚部がともに残存し、全体形が把握できるものを抽出した。また、杯部・脚部の個別値を図上より測定し観察表を作成した(第6表)。集成した高杯C類の口径・底径・器高の平均値はそれぞれ12.0cm・7.6cm・7.9cmである。器高/脚部の平均値は、2.44で、概ね杯部と脚部の高さが同等か、脚部がやや長い長脚(第6図1~8、以下数字は同図)と脚部の占める割合が低い短脚(0.9~18)に大別される。本遺跡出土品は、口径が13.8cm・底径9cm・器高8.9cmとやや平均を上回り、器高/脚部は3.18と短脚に分類される。

高杯C類は9世紀以降にはほとんど出土例がなく、短脚のものは8世紀前半に集中しているようである。口径/底径や器高/脚部などの比率で類似性のあるものは、五千石遺跡(0)[松島・山下ほか2010]・三角田遺跡(15)[松島2001]・八幡林遺跡(12)[田中2005]出土品がある。これらについては6世紀後半の五千石遺跡以外は7世紀後半の年代が与えられている。この他に法量・器形ともに近似している下ノ西遺跡(10)[田中2003]出土の須恵器の高杯は、同遺構の共伴遺物により7世紀中葉頃の年代が与えられており、本遺跡出土品がその年代を遡る可能性は低いと考えられる。また、本遺跡近隣の下新田遺跡(11)[龍田ほか2015]出土品は本遺跡出土品より小型ではあるが、口径/底径や器高/脚部などの比率が近似している。年代については、報告者により春日編年Ⅲ期(8世紀前半)の所産であるとされている。また、五千石遺跡・三角田遺跡・下新田遺跡・八幡林遺跡と本遺跡は、信濃川流域に位置しており、この地域において短脚高杯C類の出土に一定のまとまりを有する。これらの遺跡の出土品との法量・器形の比較結果においては、本遺跡出土品は時期的には春日編年Ⅲ期(8世紀前半)の所産である可能性が高い。しかし、他の遺物との共伴関係から春日編年Ⅳ期(8世紀後半)までの幅を考慮する必要がある。

また、SK4から出土した小甕はいわゆる西古志型甕[坂井1990・1996、春日2000・2007・2015など]で、口縁端部を面取りして、ハケメ整形を特徴としている甕であり、島崎川流域を中心に西川流域で一定量確認され信濃川左岸とその周辺に広く分布している[春日2000・2007・2015]。存続時期は、春日編年のⅣ期(8世紀後半)に出現し、Ⅴ期(9世紀前半)に増加して、Ⅵ期(9世紀後半)に確認されなくなるとされている[春日2007]。本遺跡周辺からは、林付遺跡[相田ほか2012]、仲歩切遺跡[龍田2016]などにおいて出土例が報告されている。特に、林付遺跡[相田ほか2012]においては、図版掲載遺物に限れば、上層で甕全体の1割、下層では3割が西古志型甕とされ、Ⅴ期に増加するという指摘に一致している。本遺跡は確認調査において、9世紀代の佐渡小泊窯跡群産の須恵器が出土していることなどから、古墳時代から9世紀代までの存続時期が考えられており、西古志型甕の存続時期はその中に含まれている。また、西古志型甕の出土地域は短脚の高杯C類の出土地域とある程度の重なりが見られることも注目される。

## 第2節 島灘瀨遺跡の性格

島灘瀨遺跡においては、古代の遺構として土坑4基、溝1条が検出され、春日編年Ⅲ~Ⅳ期(8世紀代)を主体とする遺物が出土した。島灘瀨遺跡の南東2.5kmに位置する下新田遺跡では、県営ほ場整備事業道上地区に伴って平成24・25年度に調査が行われ、8世紀前半を主体に9世紀後半まで断続的に居住地として利用された集落跡であると報告されている[龍田ほか2015]。立地や主体時期が類似する同遺跡は、約1mの厚い堆積層に覆われているのに比し、本遺跡では遺構確認面の現況水田からの深度が0.2~0.3mと比較的浅く、未分解腐植物を多量に含むような湿地性堆積層も確認できない。今回の調査地は、旧鎧潟隣接地という立地条件にもかかわらず、比較的安定した自然堤防上の沖積微高地に所在し、遺跡形成時からの地形変化は少なかったことがうかがえ

る。第14図は、昭和23年に撮影された米軍写真をもとに畑地と集落範囲を囲んだもので、現在の巻東町集落から北西の旧鎧潟方面に延びる幅150mほどの自然堤防が復元できる。この範囲は試掘・確認調査(第3図)で遺構・遺物が確認された範囲とも一致し、北西端では島灘瀨遺跡が登録される契機となった古墳時代の遺物が出土したとされ<sup>註)</sup>、試掘・確認調査では、53Tで非ロクロ成形の土師器煮炊具が、本調査区周辺の360Tで9世紀代の遺物が出土している。島灘瀨遺跡は、この自然堤防上の微高地を中心に営まれた集落と考えられ、存続時期は古墳時代から9世紀代までの幅を考慮しておく必要がある。



第14図 島灘瀨遺跡周辺の旧地形

今回の調査区は、自然堤防南端にあたる。調査面積の制約もあり、明確な住居

跡は未検出であるが、遺構・遺物に一定のまとまりを有し、流れ込みの遺物ながらも土製支脚の破片(16)が確認できることから、居住域の一部であったと考えられる。プラントオパール・花粉分析では、低値ながらイネ科植物を検出したことから、近隣地での稲作の可能性が推定され、低地化する調査区南側に水田が存在した可能性が高い。だが、試掘・確認調査の結果からも集落中心部がうかがえる地点はなく、集落の規模は不明瞭である。

島灘瀨遺跡周辺では、春日編年Ⅱ～Ⅲ期(7世紀後葉～8世紀前葉)に遺跡数が増加することが指摘されており(春日2014)、近年、追認するように下新田遺跡や新道遺跡(相田2015)、仲歩切遺跡(龍田2016)など、同時期の調査成果が増加している。島灘瀨遺跡もこうした遺跡数増加の動きに連動した集落の様相を示す一例といえよう。

註) 巻町史編纂カード(新潟市歴史文化課所蔵)に出土遺物写真と土師器の赤彩壺口縁や二重口縁壺が出土したという記載がある。遺物の所在については不明となっている。

別表1 遺構計測表

凡 例

1. 遺 構 名 記載順は、SK→SD→Pitとし、さらにその種別ごとに番号順とした。
2. 時 代 遺構の所属する時代は大きな区分によった。各遺構の詳細な時期については本文中に示した。
3. 主軸方向 土坑・溝状遺構等、必要と思われるもののみ計測した。
4. 平面形・規模 溝状遺構については、長軸が長さで、短軸が幅である。
5. 断面形・深度 断面形はセクションライン上の形状を基本とした。深度は上端の最大標高と底面の最少標高の差である。
6. そ の 他 表中の ( ) は推定、あるいは残存値である。

図版 No.	写真 図版 No.	遺構名	グリッド	時代	確認 面	主軸方位	規模 (m)					底面標 高 (m)	形態		分層	切り合い関係	出土遺物	遺物 図版 No.	備考
							上端		下端		深度		平面	断面					
							長軸	短軸	長軸	短軸									
5	5	SK4	11F-4H11	奈良	Ⅲ	N-10°-E	(1.54)	1.00	0.92	0.44	0.16	0.71	楕円形	皿形	1	SD1・2に切られる	土師器・須恵器	6	
5	5	SK8	11F-5H11	奈良	Ⅲ	N-S	0.90	(0.46)	0.72	0.37	0.21	0.73	楕円形	皿形	1	なし	土師器	6	
5	5・6	SK9	11F-5H1	奈良	Ⅲ	N-60°-W	1.40	0.58	1.01	0.22	0.19	0.70	楕円形	皿形	1	なし	土師器	6	
5	6	SK10	11F-4H11	奈良	Ⅲ	N-S	0.51	(0.35)	0.25	0.14	0.12	0.75	楕円形	皿形	1	なし	なし		
5	6	SD1	11F-4H1・6・11	近代	I e	N-63°-W	(2.20)	1.56	(2.20)	0.27	0.52	0.61		皿形	2	SK4を切る	土師器	6	
5	6	SD2	11F-4H11・16・22	奈良	Ⅱ	N-60°-W	(2.16)	2.43	(2.16)	0.47	0.23	0.77		皿形	1	SK4を切る	土師器・石製品	6	
5	3	Pit5	11F-3H21		Ⅲ	N-67°-W	0.34	0.30	0.14	0.11	0.38	0.50	円形	箱形	1	なし	なし		
5	3	Pit6	11F-3H21		Ⅲ	N-15°-E	0.27	0.25	0.15	0.15	0.25	0.64	円形	台形状	1	なし	なし		
5	3	Pit7	11F-3H21		Ⅲ	N-30°-E	0.25	0.25	0.09	0.09	0.35	0.54	円形	台形状	1	なし	なし		

別表2 土器観察表

凡 例

1. 出土位置 遺構出土遺物について、グリッド・層位が特定できるものについては記載した。
2. 法 量 括弧付の数値は遺存率の低いものである。
3. 胎 土 「含有物」の欄については、胎土中に含まれる鉱物・小礫等について記した。「石」は石英、「長」は長石、「雲」は雲母、「海」は海綿骨針、「角」は角閃石、「子」はチャート、「赤」は赤色粒、「白」は白色粒である。比較的大きい粒を含む場合、には括弧内に粒径も記した。観察はルーペを用いた肉眼観察による。
4. 色 調 土器の外面色調について記した。記号は『新版標準土色帳』(小山・竹原1967)による。
5. 焼 成 酸化炎焼成・還元炎焼成の区別を記した。
6. 底 部 「ヘラ切り」は回転ヘラ切りによる底部切り離し、「糸切り」は回転糸切りによる底部切り離しを示す。
7. 遺 存 率 口縁部と底部について分数表示で遺存割合を示した。

図版 No.	報告 No.	出土位置			器種	法量 (cm)			胎土	色調		焼成	製作痕・文様等			遺存率		付着物・使用痕跡等		備考
		遺構	グリッド	層位		口径	底径	器高		含有物	外面		内面	外面	内面	底部	口縁部	底部	内面	
6	1	SK4	11F-4H11	1	土師器	無台杯	(14.0)		(3.25)	石・白	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/2	酸化	ナデ ハケメ	ナデ		1/36		スス	
6	2	SK4	11F-4H11	1	須恵器	無台杯	13.4	8.2	3.65	石・白・海	灰白 2.5Y8/1	灰白 2.5Y8/2	還元	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り?	7/36	11/36		重ね焼痕あり
6	3	SK4	11F-4H11	1	土師器	高杯	13.8	9.0	8.9	石・雲・海	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR6/4	酸化	ナデ ハケメ 脚部下ヘラケズリ	ナデ	内側に凹むヘラケズリ	18/36	27/36	スス	
6	4	SK4	11F-4H11	1	土師器	小甕	(19.6)		(4.40)	石・白	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい褐 7.5YR6/3	酸化	ナデ ハケメ	ナデ ハケメ					
6	5	SK4	11F-4H11	1	土師器	小甕	(12.4)		(5.35)	石・白	にぶい黄橙 10YR7/2	灰黄 2.5Y7/2	酸化	ナデ ハケメ	ナデ ハケメ		7/36		スス	西古志型甕
6	6	SK8	11F-5H11	1	土師器	小甕	(14.0)		(4.3)	石・雲・白	にぶい赤褐 5YR5/4	灰黄 2.5Y7/2	酸化	ナデ ハケメ	ナデ ハケメ		3/36		スス	赤彩
6	7	SK9	11F-5H1	1	土師器	長甕		6.5	(8.0)	石・白	にぶい橙 7.5YR7/3	浅黄橙 7.5YR8/3	酸化	ハケメ ミガキ 指頭圧痕		内面ヘラ押し痕	36/36		スス	底面砂粒
6	8	SD1	11F-4H6	2	土師器	高杯	(12.6)		(3.0)	石・白	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	酸化	ヨコナデ	ヨコナデ		3/36			脚部、赤彩?
6	9	SD1	11F-4H6	2	土師器	長甕	(18.0)		(7.9)	石・雲・白	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/3	酸化	ナデ ヘラケズリ	ナデ		1/36			
6	10	SD2	11F-4H11	1	土師器	小甕	(17.1)		(6.95)	石・海	にぶい黄 2.5Y6/3	にぶい黄 2.5Y6/3	酸化	ナデ ハケメ	ナデ ハケメ		1.5/36			
6	11	SD2	11F-4H16	1	土師器	小甕		(6.0)	(2.45)	石・白・海	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/4	酸化	ヘラケズリ			9/36			
6	12		11F-4H6	Ⅲa	土師器	小甕	(12.9)		(4.0)	石	にぶい褐 7.5YR6/3	にぶい黄橙 10YR7/3	酸化	ヘラケズリ ハケメ、ナデ、指頭?	ナデ ハケメ		1/36		スス	
6	13		11F-4H11	Ⅲa	土師器	無台杯	(12.0)		(2.6)	石	橙5YR6/6	にぶい黄橙 10YR7/3	酸化	ヘラケズリ	ナデ ハケメ		1/36		スス	
6	14		11F-5H1	Ⅲa	土師器	無台杯	(15.0)		(2.9)	石・白・海	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/3	酸化	ナデ ミガキ?	ナデ ミガキ?		2/36			

別表3 土製品観察表

図版 No.	報告 No.	出土位置			器種	法量 (cm)			重量 (g)	色調	焼成	備考
		遺構	グリッド	層位		長さ	幅	厚さ				
6	16		11F-5H1	I d	支脚	(4.85)	(4.65)	(4.4)	56.2	にぶい黄橙 10YR7/2	酸化	外面ケズリ 裏面欠損

別表4 石製品観察表

図版 No.	報告 No.	出土位置			器種	遺存 状態	法量 (cm)			重量 (g)	備考	
		遺構	グリッド	層位			長さ	幅	厚さ			
6	15	SD2	11F-4H16	2	軽石	軽石製石製品	完形	21.6	21.4	17.2	2.3	右側面に打痕?あり

## 引用・参考文献

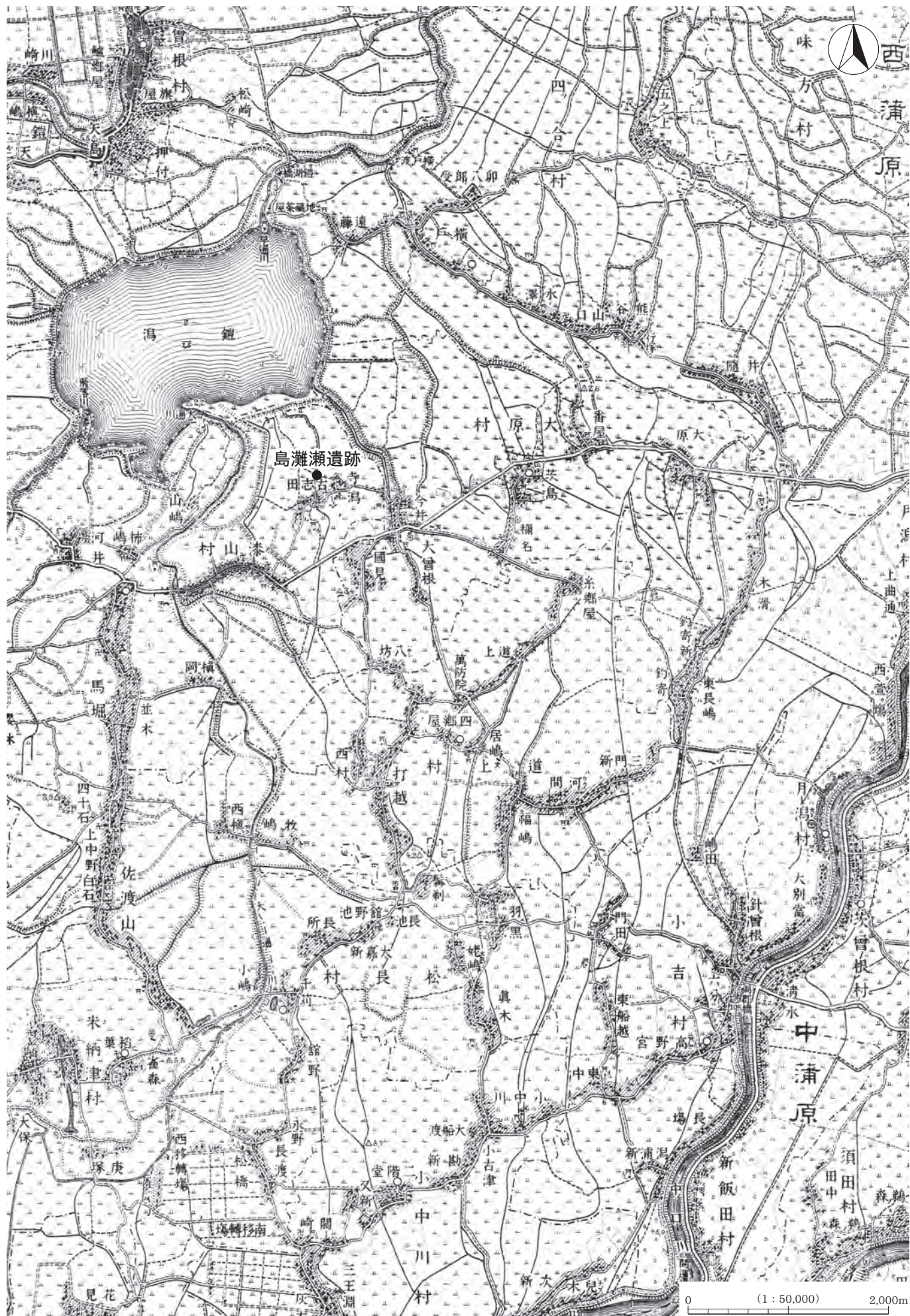
- ア 相田泰臣 2004 「越後における古墳時代後期を中心とした土器の様相―頸城・魚沼地域を中心として―」『新潟考古』第15号 新潟県考古学会
- 相田泰臣<sup>ほか</sup> 2012 『林付遺跡 第2次調査―新潟市立潟東南小学校校体育館建設に伴う林付遺跡第2次発掘調査報告書―』新潟市教育委員会
- 相田泰臣 2015 「Ⅱ 2 (4) 新道遺跡 第1次調査」『新潟市文化財センター年報』第2号 新潟市文化財センター
- 甘粕 健・小野 昭<sup>ほか</sup> 1993 『越後山谷古墳』巻町教育委員会
- 諫山えりか 2004 『新潟市山木戸遺跡―マンション等建設予定地内発掘調査報告書―』新潟市教育委員会
- 伊藤秀和 2005 『馬越遺跡』加茂市教育委員会
- 今井さやか 2007 『日水遺跡 第3次調査―鍋田土地区画整理事業に伴う日水遺跡発掘調査報告書―』新潟市教育委員会
- 上原甲子郎 1962 「三角点下住居跡」『磐舟』新潟県教育委員会
- 江口友子<sup>ほか</sup> 2000 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第100集 北陸自動車道黒埼パーキングエリア改良工事関係発掘調査報告書 釈迦堂遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- カ 春日真実 1999 「第Ⅳ章古代 第2節 土器編年と地域性」『新潟県の考古学』新潟県考古学会編 高志書院
- 春日真実 2000 「考古編 第5章 まとめ」『吉田町史 資料編1 考古・古代・中世』吉田町
- 春日真実<sup>ほか</sup> 2004 『越後阿賀北地域の古代土器様相』新潟県古代土器研究会
- 春日真実 2005 「越後における奈良・平安時代土器編年の対応関係について―「今池編年」・「下ノ西編年」・「山三賀編年」の検討を中心に―」『新潟考古』第16号 新潟県考古学会
- 春日真実 2006 「越後における7世紀の土器編年」『新潟考古』第17号 新潟県考古学会
- 春日真実 2007 「越後における古代の煮炊具について」『新潟考古』第18号 新潟県考古学会
- 春日真実 2014 「古代遺跡の動態―西蒲原地域を事例として―」『郷土史燕』第7号 燕市教育委員会・燕市郷土史研究会連合会
- 春日真実 2015 「古代西蒲原地域の土師器煮炊具」『郷土史燕』第8号 燕市教育委員会・燕市郷土史研究会連合会
- 金子拓男<sup>ほか</sup> 1983 『緒立遺跡発掘調査報告書』黒埼町教育委員会
- 川上貞雄 1989 『大沢谷内遺跡発掘調査報告書』小須戸町教育委員会
- 川上貞雄 1997 『上浦 A 遺跡』新津市教育委員会
- 北村 淳・菊池康一郎<sup>ほか</sup> 2004 『中谷内遺跡Ⅲ・沖ノ羽遺跡Ⅱ・細池寺道上遺跡発掘調査報告書』新津市教育委員会
- 小池邦明・本間桂吉 1992 『山木戸遺跡第1次発掘調査概報』新潟市教育委員会
- 小池邦明・藤塚 明 1993 『新潟市の場遺跡 的場土地区画整理事業用地内発掘調査報告書』新潟市教育委員会
- 小池邦明 1999 『山木戸遺跡第2次発掘調査概要』新潟市教育委員会
- 古俣近建 1989 『ありし日の鎧潟』新潟県教育委員会
- 小山忠志・竹原秀雄 1967 『新版標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修
- サ 斎藤順作 1967 『三潟水抜一件<前>』巻町双書 第7集 巻町役場
- 斎藤順作 1968 『三潟水抜一件<後>』巻町双書 第17集 巻町役場
- 坂井秀弥<sup>ほか</sup> 1989 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第53集 新新バイパス関係発掘調査報告書 山三賀Ⅱ遺跡』新潟県教育委員会
- 坂井秀弥 1990 「新潟県三島郡与板町の製鉄遺跡」『新潟考古』第1号 新潟県考古学会
- 坂井秀弥 1996 「水辺の古代官衙遺跡」『越と古代の北陸』名著出版
- 笹澤正史・小島幸雄 1999 『上千原地区ほ場整備事業関連調査報告書―津倉田遺跡―』上越市教育委員会
- 笹澤正史 2003 「第5章 古代 第1節 時代概説」『上越市史』資料編2 考古 上越市
- 菅沼 亘・阿部恭平 2003 『馬場上遺跡発掘調査報告書』十日町市教育委員会
- 関 雅之 2000 「Ⅴ 整理調査のまとめ」『新潟県潟東村の所蔵の考古資料整理報告―谷川忠壽美氏収集資料の調査記録―』潟東村教育委員会
- タ 龍田優子<sup>ほか</sup> 2015 『下新田遺跡 第6・8・9次調査―県営ほ場整備事業(経営体育成基盤整備型)道上地区に伴う第3・5・6次発掘調査報告書―』新潟市教育委員会



- 龍田優子 2016 「Ⅱ 2 (10) 仲歩切遺跡 第3次調査及び工事立会」『新潟市文化財センター年報』第3号 新潟市文化財センター
- 田中 靖 1994 『和島村埋蔵文化財調査報告書第3集 八幡林遺跡』 和島村教育委員会
- 田中 靖 1998 『和島村埋蔵文化財調査報告書第7集 下ノ西遺跡—出土木簡を中心として—』 和島村教育委員会
- 田中 靖 2000 『和島村埋蔵文化財調査報告書第9集 下ノ西遺跡Ⅲ』 和島村教育委員会
- 田中 靖 2003 『和島村埋蔵文化財調査報告書第14集 下ノ西遺跡Ⅳ』 和島村教育委員会
- 田中 靖 2005 『和島村埋蔵文化財調査報告書第16集 八幡林遺跡Ⅳ』 和島村教育委員会
- 田辺一彦<sup>ほか</sup> 2002 『漆山の歴史』 漆山の歴史・由来をひもとく会
- 寺崎裕助・高浜信行<sup>ほか</sup> 2000 「味方排水機場遺跡 調査報告書」『味方村誌』 通史編 味方村
- 寺村光晴 1960 「越後六地山遺跡」『上代文化』30 国学院大学考古学会
- 寺村光晴 1961 「新潟県西蒲原郡六地山遺跡」『日本考古学年報』9 日本考古学協会
- 戸根与八郎 1984 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第35集 上新バイパス関係遺跡発掘調査報告書Ⅰ 今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 戸根与八郎<sup>ほか</sup> 1992 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第28集 北陸自動車道関係発掘調査報告書 木崎山遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- ナ 中村恵美子・小池義人 1988 『須沢角地 A 遺跡発掘調査報告書』 青海町教育委員会  
新潟県教育委員会・巻町教育委員会 1966 『鎧潟：鎧潟干拓地域民俗資料緊急調査報告書』  
新潟市国際文化部歴史文化課 2007 『新 新潟市歴史双書 2 新潟市の遺跡』 新潟市  
新潟市史編さん原始古代中世史会 1994 『新潟市史』資料編1 原始 古代 中世 新潟市  
西蒲原郡教育委員会 編 1973 『西蒲原郡志』 名著出版
- ハ 廣野耕造 2000 『新潟市前田遺跡 県営かんがい排水事業に伴う発掘調査報告書』 新潟市教育委員会  
布施智也・中川潤次 2002 『吉田町文化財調査報告書第9集 北小脇遺跡、天神堂城跡、館屋敷遺跡、大橋遺跡—吉田町米納津地内国営排水路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』 吉田町教育委員会  
布施智也<sup>ほか</sup> 2006 『吉田町文化財調査報告書第13集 花立遺跡、小諏訪前遺跡』 吉田町教育委員会・(株)吉田建設  
北陸農政局鎧潟干拓建設事業所 1968a 『鎧潟干拓技術誌』  
北陸農政局鎧潟干拓建設事業所 1968b 『鎧潟干拓図集』  
細野高伯・伊比博和<sup>ほか</sup> 2012 『大沢谷内遺跡Ⅱ 第7・9・11・12・14次調査—一般国道403号小須戸上バイパス整備工事に伴う大沢谷内遺跡第2・4・6・7・9次発掘調査報告書—』 新潟市教育委員会
- マ 前山精明・相田泰臣 2003 『御井戸遺跡Ⅰ—2002年度確認調査の概要—』 巻町教育委員会  
前山精明・相田泰臣 2004 『御井戸遺跡Ⅱ—2003年度確認調査の概要—』 巻町教育委員会  
前山精明 2012 『大沢谷内遺跡Ⅲ 第18次調査—市道鎌倉横川線改良工事に伴う大沢谷内遺跡第2次発掘調査報告書—』 新潟市教育委員会  
巻町 1994 『巻町史』 通史編下  
松島悦子 2001 『燕市埋蔵文化財発掘調査報告書第1集 三角田遺跡—国営新荒井川排水路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』 燕市教育委員会・吉田町教育委員会  
松島悦子・山下 研<sup>ほか</sup> 2010 『燕市埋蔵文化財発掘調査報告書第6集 五千石遺跡 2区・4区西地区—特定構造物改築事業(大津津可動堰改築)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』 燕市教育委員会
- ヤ 山口栄一 1984 「西川町の遺跡」『西川町史考』その12 西川町教育委員会  
吉田恵二<sup>ほか</sup> 1982 『緒立八幡神社遺跡』 黒埼町教育委員会
- ワ 渡邊ますみ<sup>ほか</sup> 1994 『緒立 C 遺跡発掘調査報告書』 黒埼町教育委員会  
渡邊ますみ<sup>ほか</sup> 2009 『駒首潟遺跡 第3・4次調査—大型小売店舗建設に伴う駒首潟遺跡第3・4次発掘調査報告書—』 新潟市教育委員会  
渡邊ますみ<sup>ほか</sup> 2012 『四十石遺跡 第2次調査—(仮称)新赤塚埋立処分地整備工事に伴う四十石遺跡第2次発掘調査報告書—』 新潟市教育委員会

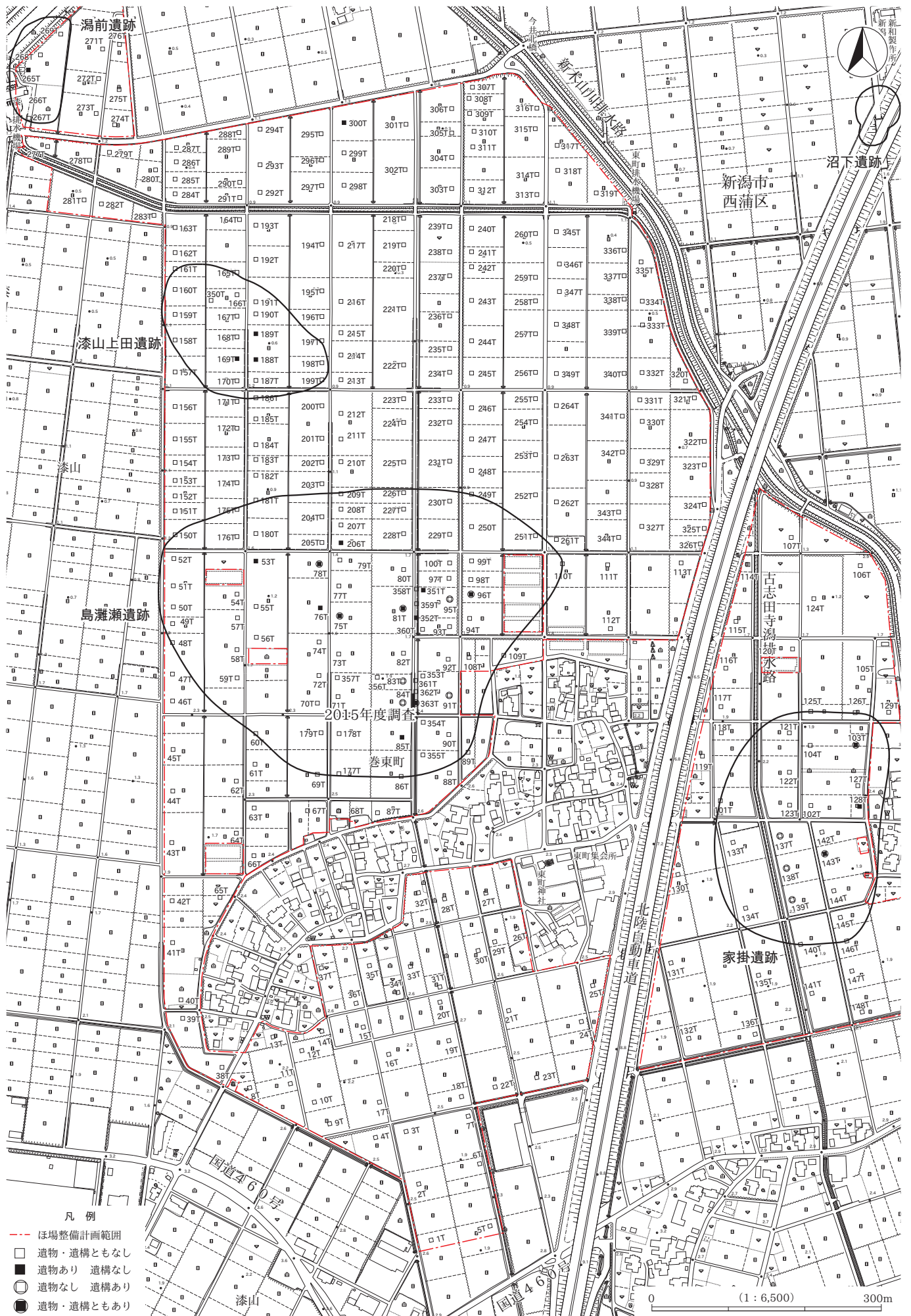
# 圖 版



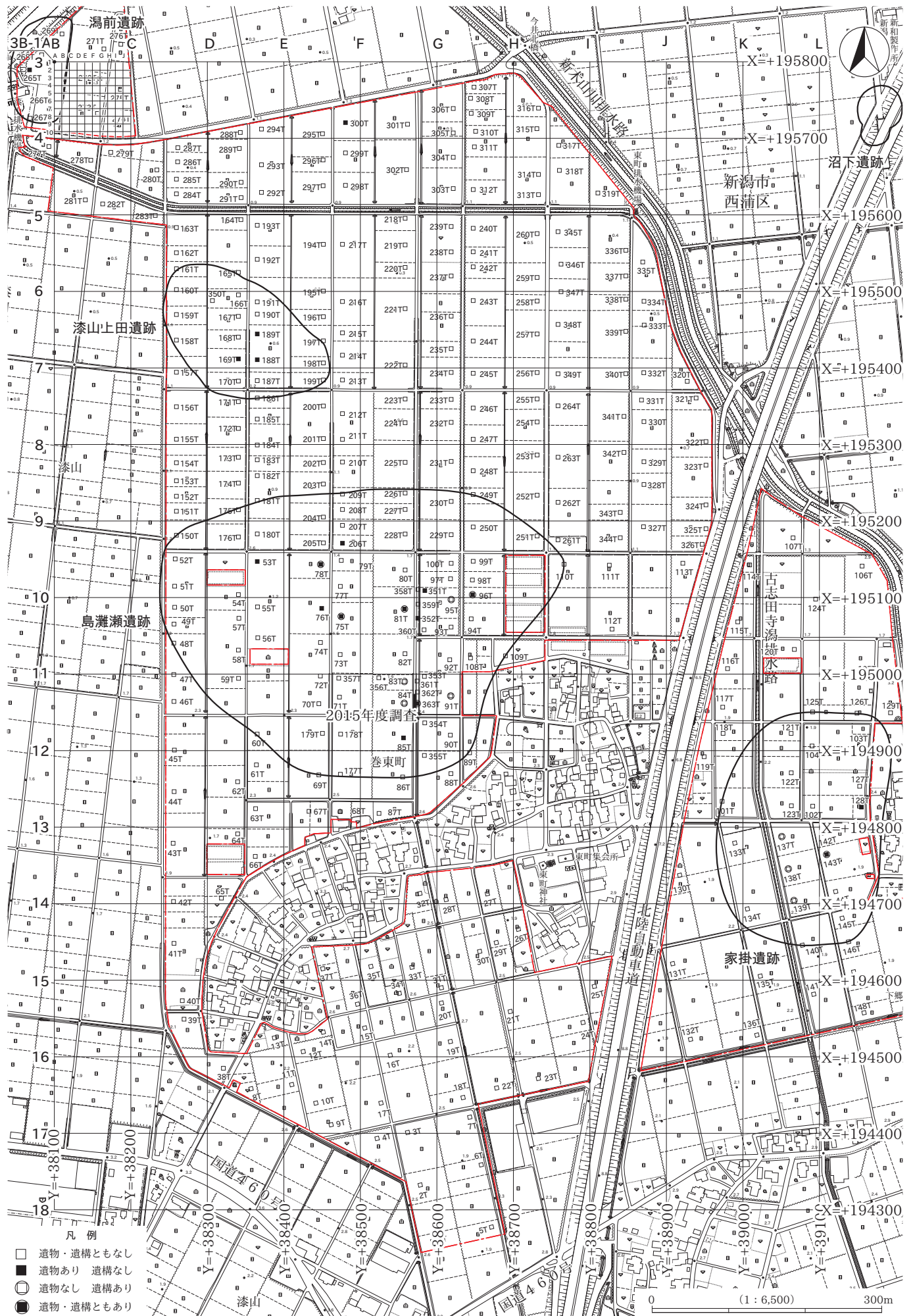






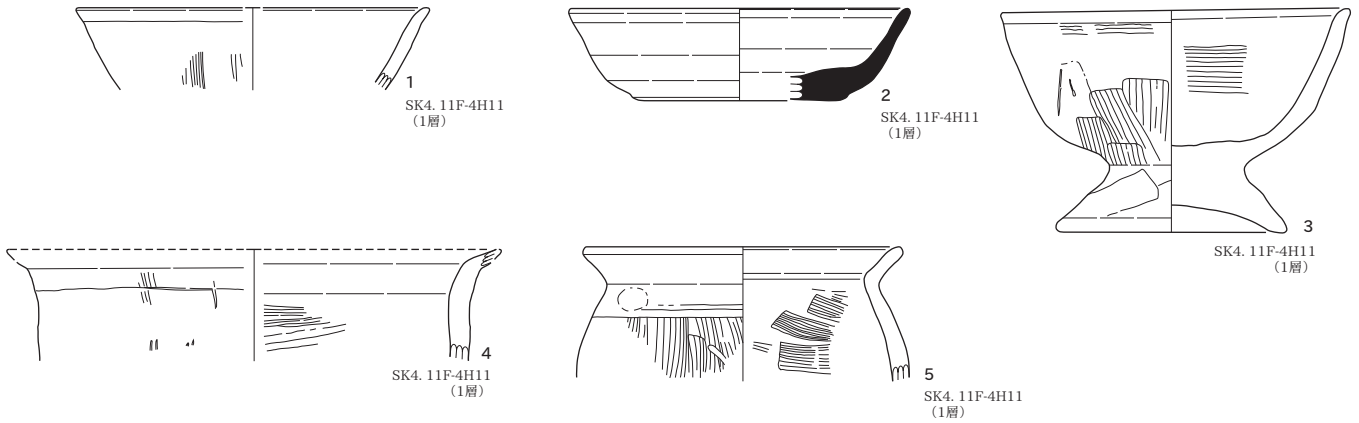




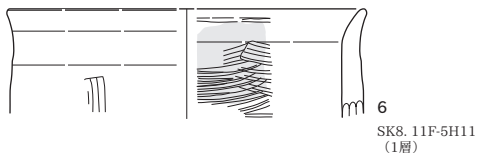


「平面直角座標値は世界測地系（測地成果2011）による。」  
 2007年発行「新潟市地形図 1:2,500」を加筆修正→1:6,500

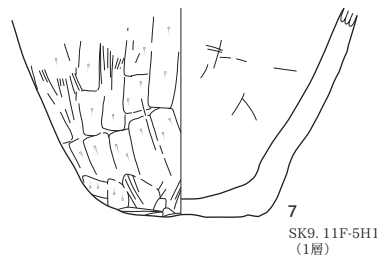
SK4 (1~5)



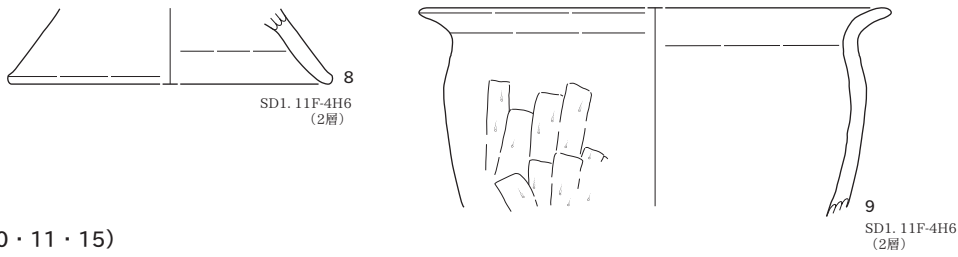
SK8 (6)



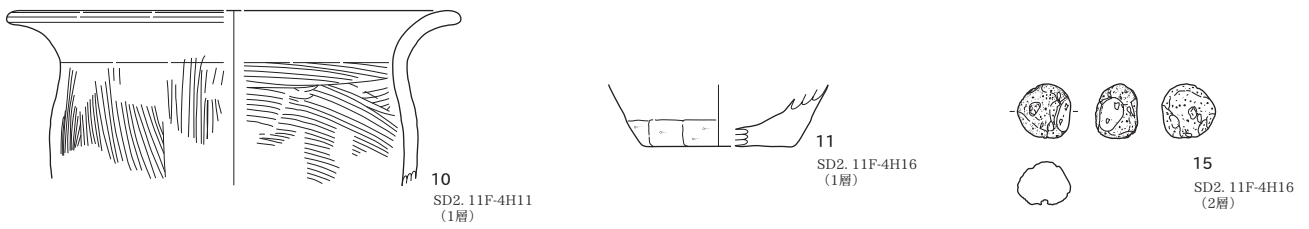
SK9 (7)



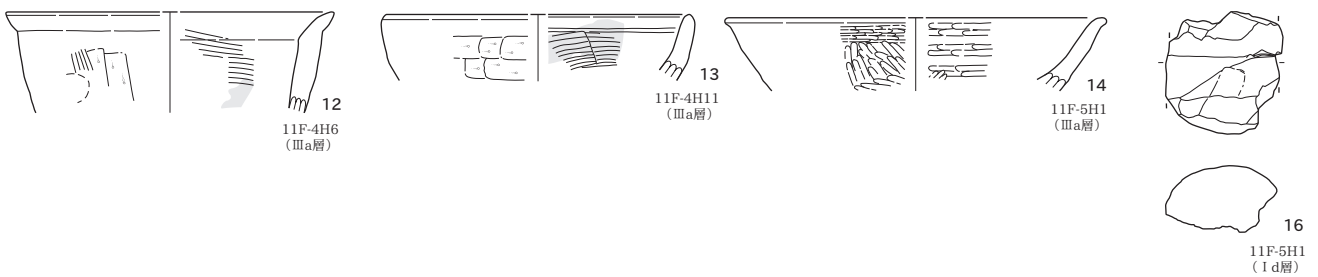
SD1 (8・9)



SD2 (10・11・15)

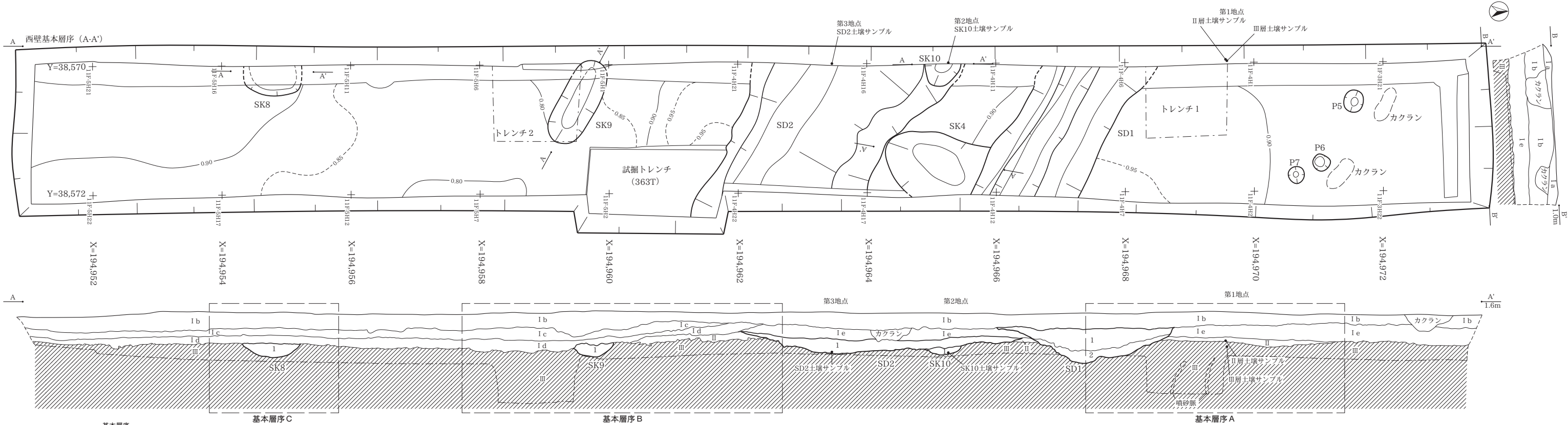


包含層 (12~14・16)



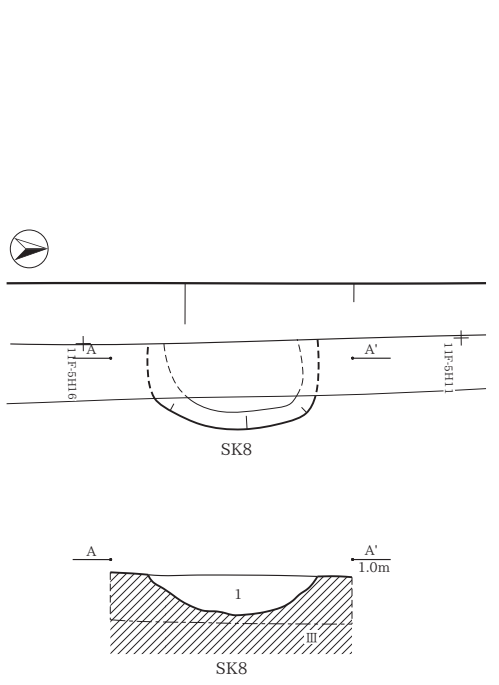
■ スス

0 (1:3) 10cm

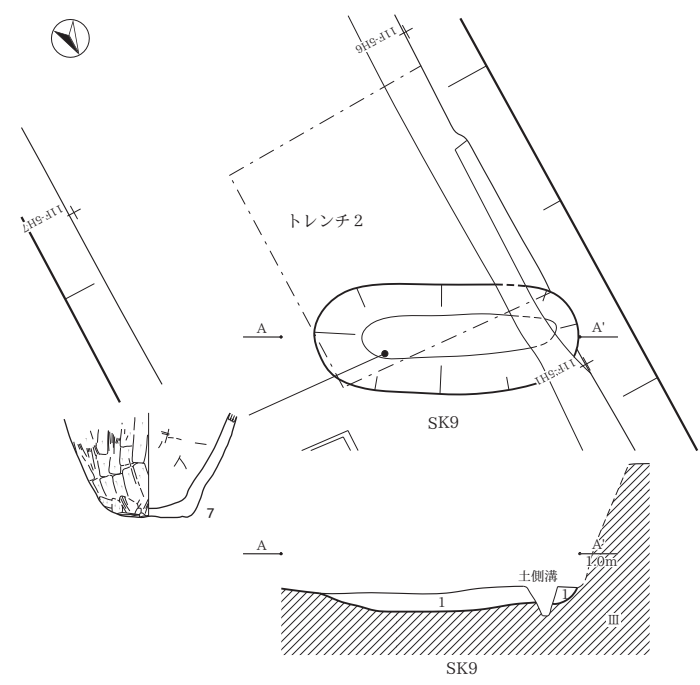


- 基本層序**
- I a 路盤砂利層
- I b 褐色シルト (7.5Y4/3) しまりあり・粘性強い。黄灰色シルト (2.5Y4/1) を塊状に多量含む。
- I c 緑灰色シルト (5G5/1) しまりあり・粘性強い。黄灰色シルト (2.5Y4/1) を塊状に多量含む。全体的にカクランを受けている水田耕作土である。
- I d 暗緑灰色シルト (5G4/1) しまりあり・粘性強い。緑灰色砂 (5G6/1) を斑状に少量含む。水田耕作土である。
- I e 褐灰色シルト (10YR4/1) しまりあり・粘性強い。黄灰色シルト (2.5Y4/1) を斑状に多量含む。
- II 黒褐色シルト (10YR3/2) しまりあり・粘性強い。灰オリーブ色シルト (5Y5/2) を斑状に少量含む。(遺物包含相当層)
- III 灰オリーブ色～灰色シルト (5Y5/2～10Y5/1) しまりあり・粘性強い。黒褐色シルト (10YR3/2) を斑状に少量含む。

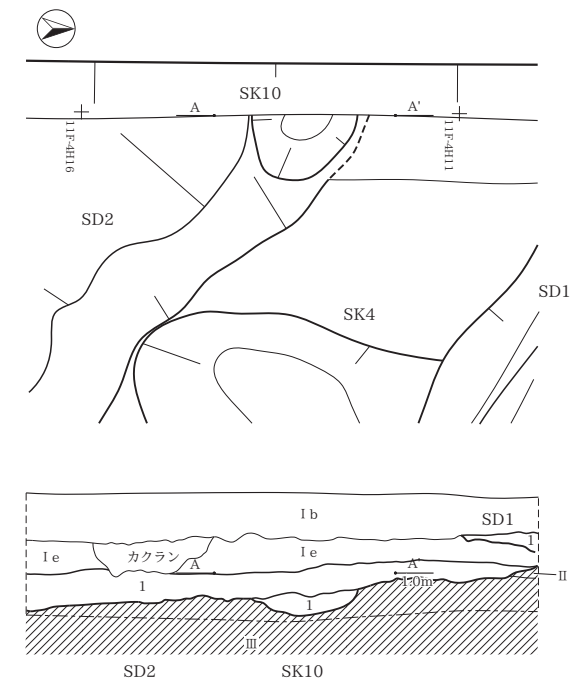
- SD1**
- 1 暗灰色シルト (N3/) しまりあり・粘性あり。オリーブ灰色砂質シルト (2.5GY6/1) を塊状に少量含む。
- 2 灰色シルト (10Y4/1) しまりあり・粘性あり。オリーブ灰色砂質シルト (2.5GY6/1) を塊状に少量含む。
- SD2**
- 1 黒色シルト (5Y2/1) しまりあり・粘性あり。暗オリーブ色シルト (2.5GY4/1) を斑状に少量含む。径5～8mm炭化物を少量含む。



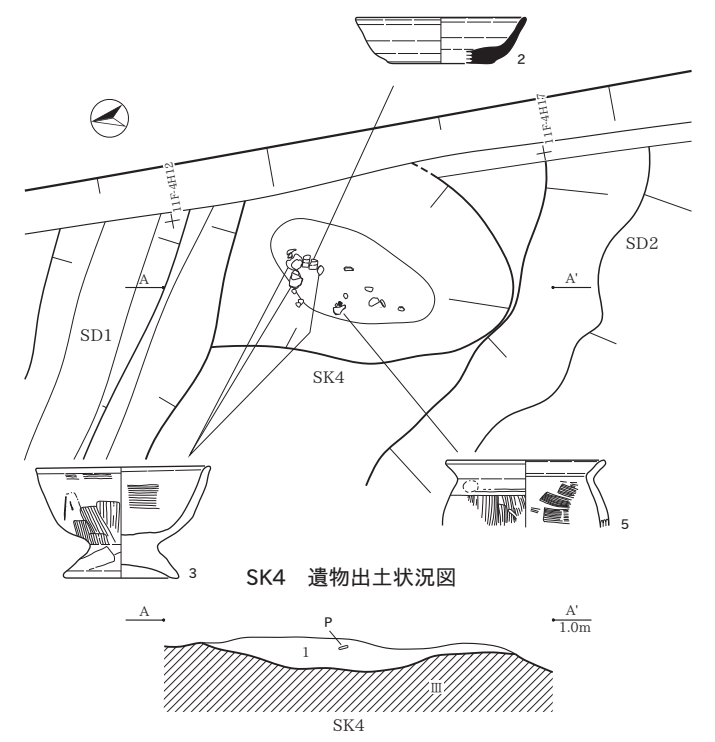
- SK8**
- 1 灰色シルト (10Y5/1) しまりあり・粘性強い。オリーブ灰シルト (5GY5/1) を斑状に多量含む。径5～20mm炭化物を中量含む。



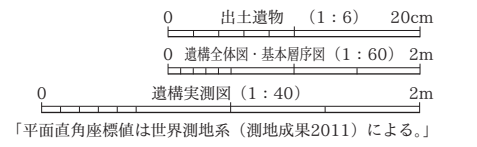
- SK9**
- 1 灰色シルト (10Y5/1) しまりあり・粘性あり。オリーブ灰シルト (5GY5/1) を斑状に少量含む。径5～10mm炭化物を少量含む。



- SK10**
- 1 黄灰色シルト (2.5Y4/1) しまりあり・粘性あり。基盤層の灰色砂質シルト (10Y4/1) を斑状に多く含む。径8～15mm炭化物を少量含む。



- SK4**
- 灰色シルト (10Y5/1) しまりあり・粘性強い。オリーブ灰シルト (5GY5/1) を斑状に含む。径5～10mm炭化物を中量含む。







[昭和 23 年米軍撮影写真と新潟市平成 19 年地形図 2500 分の 1 を合成]





着手前現況 (南→北)



着手前現況 (北→南)



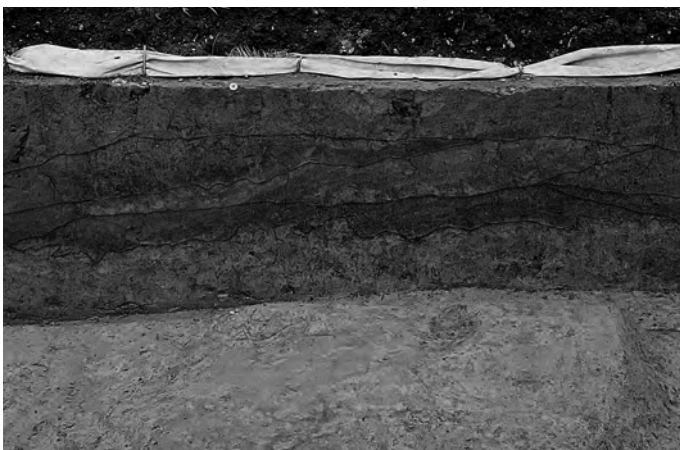
基本層序 A 北側 (東→西)



基本層序 A 南側 (東→西)



基本層序 C (東→西)



基本層序 B 北側 (東→西)



基本層序 B 南側 (東→西)



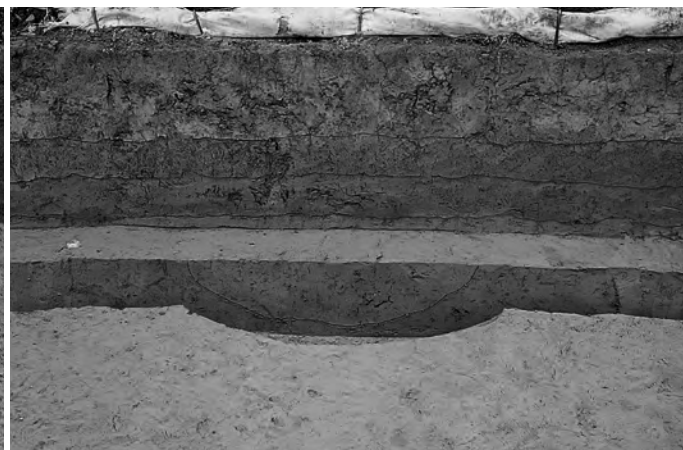
基本層序 B 下層北側 (南→北)



SK4 土層断面・遺物出土状況（西→東）



SK4 完掘状況（西→東）



SK8 土層断面（東→西）



SK8 完掘状況（東→西）



SK9 遺物出土状況（北東→南西）





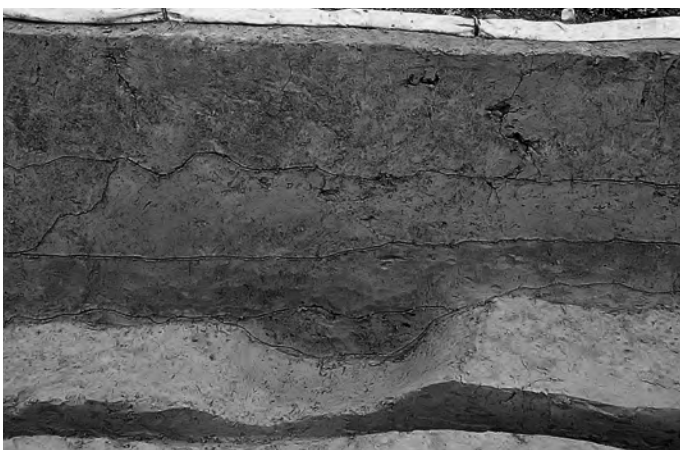
SK9 遺物出土状況(南→北)



SK9 土層断面(北東→南西)



SK9 完掘状況(北東→南西)



SK10 土層断面・完掘状況(東→西)



SD1 土層断面・完掘状況(南東→北西)



SD1 土層断面・完掘状況(東→西)



SD2 土層断面・完掘状況(東→西)



SD2 完掘状況(北→南)





調査区遠景空中写真(東→西)



調査区遠景空中写真(南東→北西)



調査区遠景空中写真(南西→北東)



調査区遠景空中写真(北西→南東)



完掘全景空中写真(東→西)



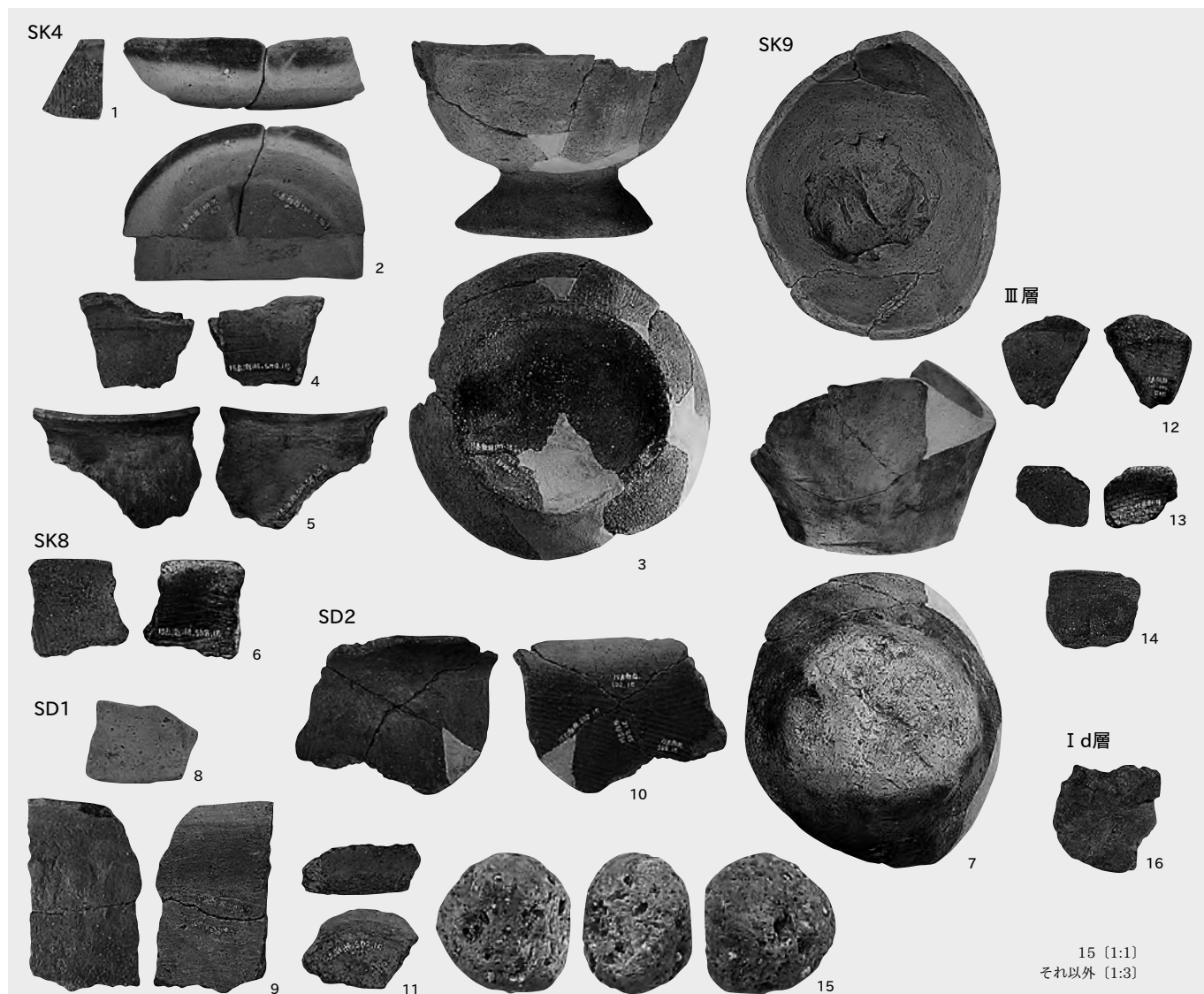


完掘全景空中写真(南→北)



完掘全景空中写真(北→南)







# 報告書抄録

ふりがな	しまなだせいせき だいごじちようさ							
書名	島灘瀬遺跡 第5次調査							
副書名	県営ほ場整備事業（経営体育成型）巻東町地区に伴う島灘瀬遺跡第5次発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	新潟市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号								
編著者名	遠藤恭雄・脇本博康・(株)火山灰考古学研究所・(株)加速器分析研究所							
編集機関	新潟市文化スポーツ部 文化財センター							
所在地	〒950-1122 新潟市西区木場2748番地1 TEL.025-378-0480							
発行年月日	西暦2016年10月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。' "	東経 。' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
しまなだ 島灘瀬遺跡	にいがたけんにいがたしにしかんく 新潟県新潟市西蒲区 まきあづまちようあだこてらがた 巻東町字小寺潟	15108	623	37° 45' 22"	138° 56' 16"	20151120～ 20151224	59.9 ㎡	県営ほ場 整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
島灘瀬遺跡	集落遺跡	古代（8世紀） 近代	土坑4基・溝1条 溝1条・小土坑3基	土師器・須恵器・土製品（支脚）・石製品				
要約	<p>島灘瀬遺跡は、西川と中ノ口川に挟まれた低地の自然堤防上に立地する。標高は遺構確認面で0.8～0.95mである。調査の結果、古代（8世紀）の遺構・遺物が検出された。古代の遺構としては、土坑・溝が検出された。土器は土師器食膳具・煮炊具、須恵器無台杯が出土し、従来の編年案に照らすと8世紀前半から後半に属する。自然科学分析の結果、低値ではあるが、イネのプラントオパール及び花粉が確認されたことから、近隣での稲作の可能性が推定される。周辺では8世紀前半から沖積地への進出がみられ、こうした動きに連動した集落の一部にあたると思われる。</p> <p>また、時期は不明であるが、地震痕跡と推定される噴砂脈を検出した。</p>							

## 島灘瀬遺跡 第5次調査

— 県営ほ場整備事業（経営体育成型）巻東町地区に伴う島灘瀬遺跡第5次発掘調査報告書 —

2016年10月28日印刷  
2016年10月31日発行

編集 新潟市文化財センター  
〒950-1122 新潟市西区木場2748番地1  
TEL 025 (378) 0480

発行 新潟市教育委員会  
〒951-8550 新潟市中央区学校町通一番町602番地1  
TEL 025 (228) 1000

印刷・製本 株式会社ハイグラフィック  
〒950-2022 新潟市西区小針1丁目11番8号  
TEL 025 (233) 0321